

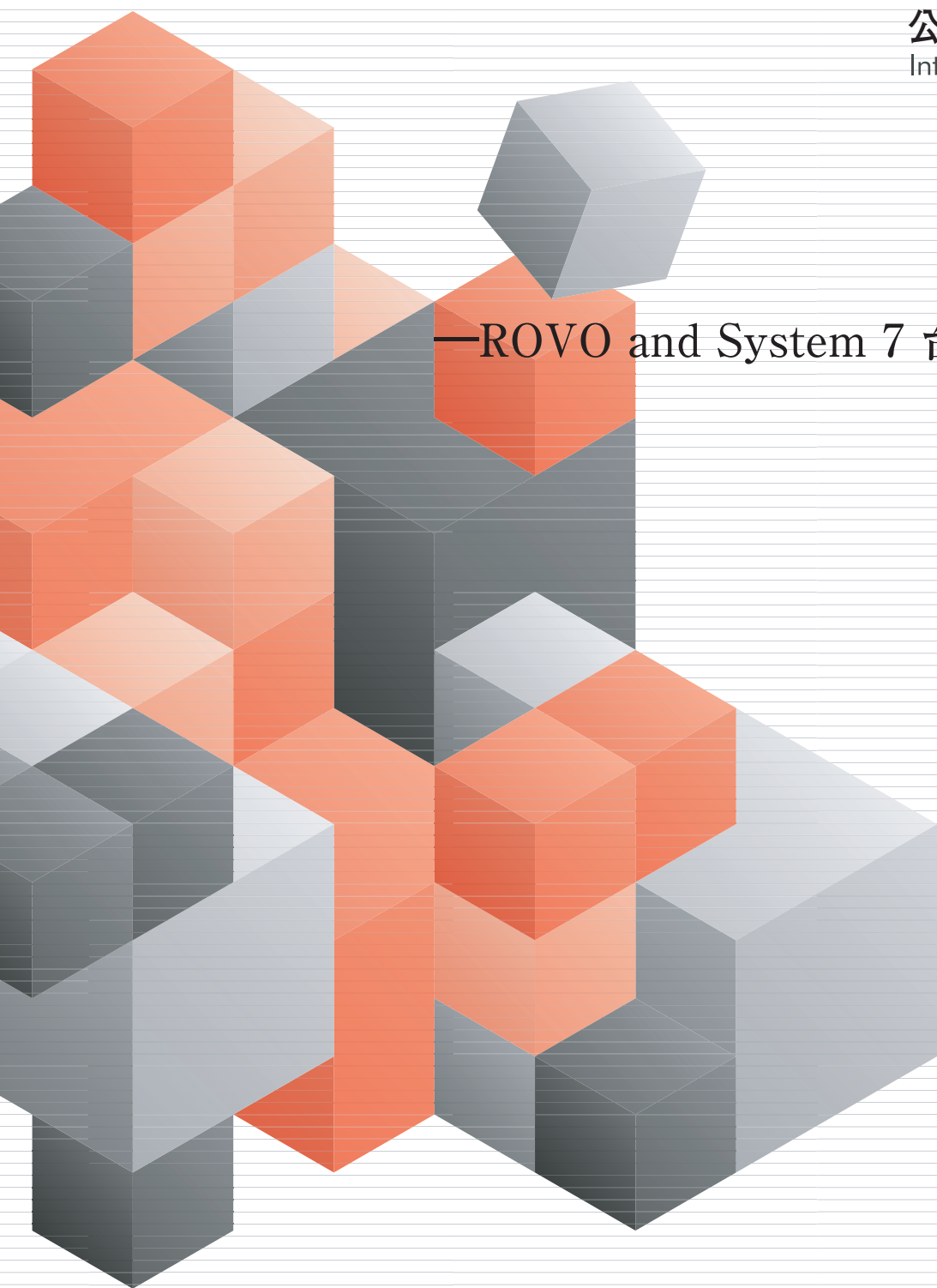
台湾情報誌

交流

2014年4月 vol.877

公益財団法人 交流協会
Interchange Association, Japan

—ROVO and System 7 台湾公演を終えて—



交流

2014年4月
vol. 877

目次

CONTENTS

ROVO and SYSTEM7「フェニックス・ライジング」台湾公演を終えて （久保田広美）	1
富士山と玉山の友好山提携 （秋山倫久）	8
【台湾内政、日台関係をめぐる動向】	
两岸サービス貿易取決めの審議をめぐる混乱 （石原忠浩）	10
現在を生きるかつての「日本人」(3) 一語りを通して現れた自己の解放— （佐藤貴仁）	21
台湾観光協会江所長と味わう台湾茶	31

※本誌に掲載されている記事などの内容や意見は、外部原稿を含め、執筆者個人に属し、公益財団法人交流協会の公式意見を示すものではありません。

※本誌は、利用者の判断・責任においてご利用ください。

万が一、本誌に基づく情報で不利益等の問題が生じた場合、公益財団法人交流協会は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

● ● 交流協会について ● ●

公益財団法人交流協会は外交関係のない日本と台湾との間で、非政府間の実務関係として維持するために、1972年に設立された法人であり、邦人保護や査証発給関連業務を含め、日台間の人的、経済的、文化的な交流維持発展のために積極的に活動しています。

東京本部の他に台北と高雄に事務所を有し、財源も太宗を国が支え、職員の多くも国等からの出向者が勤めています。

ROVO and SYSTEM7 「フェニックス・ライジング」台湾公演を終えて

株式会社マノハラ 代表取締役 久保田広美

はじめに

公益財団法人交流協会とアーツカウンシル東京の助成を得て、2013年11月26日から12月4日まで、ROVO and SYSTEM7「フェニックス・ライジング」台湾公演を実施しました。本公演は、日本のバンドROVOとイギリスのテクノユニットSystem 7のコンサートと、関連イベントとして手塚るみ子さん(漫画家手塚治虫氏実娘)のトークイベントからなる事業でした。今回、『交流』に寄せて、制作担当者として体験した日台音楽交流の舞台裏を再訪中の台湾で書いています。本公演で知り合った台湾の方々と、また別のプロジェクトが動き出しています。一方で、ROVOは3月初旬に日本を離れ、ロンドン入りしました。資金繰り次第では立ち消えるかもしれないと思われていたPhoenix Rising UK / EU ツアー。台湾公演終了後、再びアーツカウンシル東京、そしてJ-LOPの2件の助成が得られ実現可能となりました。イギリス4公演、ベルギー、オランダ、合計6か所をツアーします。アジアからヨーロッパへ！火の鳥の物語はまだまだ続いています。

ROVO and SYSTEM7 Phoenix Rising Project

本公演は、ROVO and SYSTEM7 Phoenix Rising Projectの一環として行われました。これは、様々な運命的な出逢いや出来事が重なって生まれたプロジェクトで、日本のROVO、イギリスのSystem 7という日英のバンドが、“Phoenix”をテーマに合体して演奏するコラボレーション・プロジェクトです。手塚治虫の代表的作品『火の鳥』が縁となって始まりました。

ROVOは1996年にヴァイオリニスト勝井祐二とギタリスト山本精一を中心に結成された東京を拠点としたバンドです。日比谷の野外音楽堂で自主コンサート“MDT フェスティバル”をすでに11年連続で開催しています。

System 7は、Steve HillageとMiquette Giraudyの二人から成るイギリスを代表し国際的にも活躍するテクノユニットです。

この2つのバンドが合体して演奏することで、System 7のテクノビートとROVOのバンドサウンドが調和し、さらにそのサウンドにシンクロナイズドする斬新なコンピューターグラフィックス映像、LEDやレーザーを駆使したアーティスティックな照明を伴うステージは多くの観客を魅了してきました。

それぞれのバンドは、このプロジェクト以前から手塚作品と縁がありました。ROVOは2003年に、手塚るみ子さんプロデュースの鉄腕アトム生誕記念CDアルバムで「ASTROVO」という楽曲を制作。System 7は、手塚るみさんと共に、2007年に漫画『火の鳥』にインスパイアされた楽曲アルバム『PHOENIX』を発表。手塚るみさん、『鉄腕アトム』、『火の鳥』という手塚作品と縁があった両バンドは、運命的な出逢いを果たし、このプロジェクトが始まります。しかし、震災前に企画段階にあったプロジェクトは、震災によりいったん中断してしまいます。それを再び立て直そうとした時の想いを、ROVOのリーダーの勝井祐二は以下のように書いています。

何度でも蘇る不死鳥、再生のシンボルでもあるフェニックス。これが今の日本の僕らに必要なも

のなんじゃないだろうか。その事をプロジェクトメンバーに伝えた時に、全員が同じ思いを共有する事が出来て、自分達のやるべき事としてはっきりイメージする事が出来たのです。すぐにスティーブとミケットに連絡しました。彼らはとても共感してくれて、このプロジェクトを「Phoenix Rising」と名付けてくれました。（『Phoenix Rising』LP内ライナーノーツより引用）

こうして、2011年の日本ツアーで、HINOTORIつまり不死鳥の「復活」と「再生」をテーマにした音楽と映像による斬新なライブを行い、震災後、停滞していた日本の音楽シーンの活性化に貢献、日本から世界へ向けてポジティブなメッセージを発信しました。十分な手応えと可能性を確信した本プロジェクトは、2年ぶりの2013年、ニューアルバム制作、そしてSystem 7を日本へ招聘してツアーを行う事を決めたのです。

助成の採択と台湾公演実施への道のり

舞台監督の王本泰氏から「日本ツアーだけでなく海外公演も視野に入れている。台湾公演ができないだろうか」という相談を受けたのが2013年の2月の事。手塚作品の愛読者も多く、震災後、日本の復興の為に多くの義捐金を送ってくれた台湾へ、そして広くアジア、ゆくゆくはヨーロッパへ、この「復活」と「再生」の音楽を届けたいというプロダクションの想いに賛同し、ちょうどアーツカウンシル東京の海外公演助成プログラムが発表されたこともあったので、助成申請を提案し、台湾公演の実現に向けてお手伝いしましょうと、ここで初めて私はプロジェクトに参加することを決めました。

私の祖父母は、戦前から終戦まで、30年近く台湾に住み、また私自身も父の仕事の関係で台湾で幼少時代を過ごしました。数十年という時を経て、仕事という形で再び台湾に関わることになる

とは、これまた運命という他ありません。

さて、アジアで大切にすべきはやはり人と人とのつながりです。台湾には約10年前にSystem 7の台湾公演を企画した音楽プロデューサー陳世興氏がいました。陳氏は日本の音楽シーンの良き理解者であり3.11の一週間後には華山1914内でチャリティコンサートを開催した程の親日家であり、舞監の王と親交がありました。台湾側パートナーとしてお願いできるのは、System 7の音楽を理解している彼しかいません。早速、かねてよりSystem 7を再び台湾に呼びたいと言っていた陳氏に、プロジェクトの説明と台湾公演の可能性について相談すると、「台湾でも紹介したい！一緒にやろう！」と、二つ返事で引き受けてくれ、Phoenix Risingを“鳳凰昇起”と縁起のいい中文に翻訳してくれました。

早速3月に王と私は、陳氏との打ち合わせの為に台北に飛びました。会場を選び、プロモーターを探し、助成金申請用の書類作成も依頼しなくてはなりません。台北にはいくつかわ有名なライブハウスがありますが、8人の演奏家に必要なステージの広さ、会場設備、収容人数を考慮すると、華山1914内のLegacyが今回のパフォーマンスを実現するのにベストな環境であり、なおかつ台北における最先端文化発信地とのことで、台湾滞在中に会場を下見し担当者に会い、仮予約を入れました。プロモーターも見つかり、台湾側の受け入れ態勢は整いました。

あとは資金調達です。台湾ツアーは、演奏家8名、音響、照明、映像、楽器テクニカル、制作等のスタッフを含めると20名近い人数になります。助成金やスポンサーなしには実現困難なのは明らかでした。台湾出張の成果をROVOのマネージャーであるワンダーグランド・ミュージックの小川氏に引き継ぎ、3月メ切のアーツカウンシル東京の海外公演助成に申請してもらい結果を待ちました。「採択の通知が来ました！」と小川氏が

ら連絡が来た時は奇跡だと思いました。まさか、ダンスミュージックのバンドが東京都の助成金をいただけるとは！必ず台湾公演を成功させようと、日台のスタッフ一同、勢いがつきました。

そしてさらに、6月にご挨拶に伺った（公財）交流協会台北事務所で後援助成の情報をいただき、8月に申請、ツアー出発まで2か月余りの2013年9月、郵便受けに届いた封筒の中には後援助成決定の通知がありました。アーツカウンシル東京に続き2件目の助成を得る事が出来ました。私たちのプロジェクトは、2件の助成に支えられていました。

手塚漫画の力とプロモーション

今回の台湾ツアーでは、台湾ではほぼ無名に等しいROVOとSystem 7をどのように紹介するのか、どうしたらPhoenix Rising Projectをよく理解してもらえるだろうか、そして、ライブに足を運んでもらう為にどのような広報をするか、台湾制作側と頭を悩ませました。

手さぐりで準備を進める中で、台湾での手塚漫画の影響、時代を超えて人を惹きつける力を実感する出来事が多くありました。台湾の人々も大好きな手塚作品。ROVOとSystem 7が手塚作品とるみ子さんがきっかけで出逢ったように、両バンドと台湾の人の心をつなぐ為には、手塚漫画とるみ子さんの力を大いにお借りするのがいいのではないかと、次第に強く思うようになりました。このことが、るみ子さんを台湾へお招きしてのトークイベント企画へと発展しました。

また、当初、ポスターとフライヤーは、日本公演と統一を図り、国際的に活躍するアニメーション作家、森本晃司氏によるメカニクな火の鳥のグラフィックを使用するつもりでいましたが、それも止め、手塚プロダクションに協力をお願いし、台湾の人でも一目で分かる漫画『火の鳥』のイメージを使用することにしました。

そしてこれは翻訳版『火の鳥』の出版元である台湾東販さんにご協力いただけるきっかけにもなりました。台湾東販さんでは、まさに同時期に『火の鳥』復刻版が出版されたばかりだったのです。雑誌『BANG!』へは公演情報、『HERE!PLUS』へは手塚るみ子さんのロングインタビューを中文で掲載していただきました。

さて、手塚漫画の力を借りることは決定したものの、台湾制作側とは、言葉の問題、日台のプロモーション手法の違いなど、克服すべき多くの課題に直面し、何度も心が折れそうになりました。

今回の公演は、いわゆる出演料をいただいで買い取り公演ではなく、日本と台湾の共同主催の自主公演であったので、たとえ助成を受けていても、ある程度のチケット収入が得られなければ制作費をカバーすることはできません。台湾側と共に戦略を考え、あらゆる方面に広報しチケット販売していく必要がありました。

招聘業務・プロモーター業務をお願いした深靨感官創意工作室の陳大樹氏とは、メールやSkype会議で日々、協議を重ねました。その中で幾度となく日台の感覚の違いを痛感させられ、その度に、日本側で対策を検討して台湾に投げ返すことの繰り返しの日々でした。例えば、日本で作成したプロモーションビデオは「台湾人にとっては長過ぎる。30秒程度に縮めてくれ。もっとアップテンポな楽曲がいい」という意見が出たりして驚かされました。

インターネットの告知は、台湾で主流となっているFacebookのイベントページを中心とし、Facebook広告も活用しました。情報発信と情報交換が殆どFacebook上で行われ、刻々と「いいね!」「参加」の数が増えていくのを確認し、反応の早さに感心しました。こうして台湾の人に合った形での宣伝を心がけながらチケット発売、本番に向けて準備を進めました。

ライブチケットはライブ約2か月前の9月中旬に

発売。トークイベントはライブ前日に行い無料、誰でも参加可能としました。大きなイベントでもない私たちは、当然、何でも自分たちで行う、人海戦術です。台湾制作チームはCDショップ、ライブハウスやカフェに毎日のように営業に行ってくれました。台湾東販さんのご協力、書店でのフライヤー設置、ポスター掲出などの広報協力も得られ、また、台湾日本人会、台北市日本工商会のホームページでも紹介していただくと即座に「日本でROVOが好きでした！」という方からご予約もあり、異国の地で旧友に会った様な気持ちでとても嬉しく思いました。

ROVOを追いかけて台湾へ、或いは「ライブを機に台湾にも行ってみたいの」という日本のファンからの予約メール一件一件に、感謝の気持ち一杯で返事を書きました。地道な努力と、多くの方のご支援、ご協力の甲斐あって、少しずつ券売は伸びていき、11月28日はトークイベント、29日にライブを迎えることになります。

トークイベント

11月26日に私と王が先に台北入りし、27日にはトークイベントに出演する手塚るみ子さん、勝井祐二、System 7が他のメンバーやスタッフに先行して台湾に入ってきました。

トークイベントは、ライブ前日に“音楽と映像で魅せる「火の鳥」の世界”と称し、台北国際藝術村の“幽竹廳”で行いました。文章だけでは伝わりにくい我々の今回のプロジェクトの目的や意義を、このプロジェクトのキーパーソンである手塚るみ子さんから直接語り伝えたい、いわば“生きる手塚作品”である手塚るみさんと台湾の人々との交流の場を作りたい、そんな思いがありました。

当日は、日本のアニメ・音楽ファン、漫画家の卵、音楽家、映画関係者等、約45名が来場し、真剣に耳を傾けてくれました。

第1部でるみ子さんが、手塚作品と音楽のコラ

ボレーションをプロデュースする自身の活動について語りました。手塚治虫氏が亡くなり、手塚作品が忘れられてしまい、古典文学となってしまうのを懸念したこと、とある企画で現代アーティストの手で手塚作品が新しい形で表現される事で、若い世代にも関心を持ってもらえると手応えを感じたこと、音楽シーンにも手塚作品は影響力があり、音楽で手塚作品の魅力を伝えていきたいと話すと、来場者は皆大きく頷きます。

第2部はSystem 7のSteveがアルバム『PHOENIX』で『火の鳥』の物語を楽曲化した際のプロセスと手法を説明。Steve自身が楽曲作りのメインイメージとして選んだ漫画のコマのいくつかをスクリーンに投影すると、台湾の人々も「知ってる！」とばかりに身を乗り出したのが印象的でした。

第3部では勝井祐二がPhoenix RisingProjectの成り立ちを語り、『火の鳥』のコンピュータグラフィックス映像と音楽が融合した最新ライブ動画を紹介すると、「スゴイ！」と歓声があがりました。

質疑応答では、来場した音楽家から、台湾のアーティストを起用した手塚治虫音楽作品集を制作したいという提案もあり、交流会では似顔絵漫画作品や手作りのアート作品を持参し、るみ子さんへプレゼントする方も。

一方で、山本精一さんのファンですという日本語が堪能な台湾の女の子達が話かけてくれ、好きで良く聴く、というマニアックな日本のバンドの



名前を挙げ、台湾に来て欲しいと真剣なまなざしで言われ、台湾での日本の音楽への関心の高さに驚かされました。彼女たちの様なファンの為にも、将来的に更に広い日台芸術交流の可能性と継続の重要性を、関係者一同心から思いました。

約4時間に及ぶトークイベントと交流会でしたが、あっという間に終了し、ホテルに戻ると他のROVOのメンバーと、スタッフが大量の楽器と機材と共に台北に無事に到着。初台湾のメンバーもおり、一同、翌日のライブよりもむしろ今晚何を食べに行くかで頭が一杯な様子です。その晩は、それぞれ自由に寧夏路夜市などへ繰り出し、台湾の夜を満喫。別行動した制作チームが吸い込まれるように入ったレストランにROVOメンバーが勢揃いしているという、不思議な出来事もあり「さすが心はひとつ」と感心したものです。

翌日は、スタッフは仕込みで先に会場入り、メンバーはサウンドチェック、リハーサル。そして、いよいよ、ステージ本番です。すでに名古屋、大阪、東京とライブを重ね、一番良い状態にあるメンバーですから、アジアツアーの最終公演地である台湾で最高のステージを見せてくれること間違いありませんでした。

熱狂の渦に沸いた Legacy でのライブ

アンコールを受け、最後の曲「HINOTORI」が演奏され、Legacyのスクリーンいっぱいコンピューターグラフィクスで甦った火の鳥が映し出され、華麗に飛翔すると、会場の熱は一気に沸き立ち、観客から大歓声が上がりました。ROVO and SYSTEM7の音楽が台湾の人の心に響いたのだとはっきりと感じた瞬間でした。

正直なところ、488名の観客のうち、漫画家手塚治虫は知っているも、ROVOやSystem7は知らなかったというお客様が約8割以上だったのではないのでしょうか。「台湾人はインストゥルメンタル音楽（楽器のみで演奏されボーカルが無い音

楽)にあまり馴染みが無く、メロディアスで、メッセージ性の強い歌詞、共感できる歌を唄うアーティストが好きだから、インストゥルメンタルのダンスミュージックのROVO and SYSTEM7が台湾の観客にどのように受け止められるか分からない。」と台湾側制作チームの取りまとめをしてくれた音楽プロデューサー陳世興氏も言っていたので、不安な気持ちは拭い去れぬまま本番に突入していました。

舞台裏と観客側を行ったり来たりしながら観客の様子を伺っていた私は、1曲目から観客の、“…これ、どういう音楽?” “どういう風に聴いていればいいの?”と戸惑う雰囲気を感じとっていました。

日本での公演であれば、1曲目からお客さんは熱く、待っていたとばかりに盛り上がり、身体を揺らし踊ります。しかし、台湾の観客は未知のスタイルの音楽にどう反応していいのかわからず固くなっている様子です。“どうしよう…やりにくいだろうな…”まず、舞台上の演奏家の事が頭をよぎりました。2曲目が始まり、“このまま盛り上がらなかつたらどうしよう…”という気持ちは続きました。しかし3曲目あたりから、少しずつ観客が緩み始めたのを感じました。「なんだ、好きなように踊ればいいんだ!」という感じで思い思いに体を動かしたりする観客が徐々に増えていったのです。

今思えば、戸惑いというより、一生懸命聴いて理解しよう、受け止めようとする真摯な姿勢の表



れだったのでしょう。また、前日のトークイベントにも来てくれていた台湾のファン、日本から来てくれたファンが最前列で踊っていてくれたことも、台湾の人々のお手本になったのだと思います。

こうして、アンコール曲、「HINOTORI」での会場の一体感、観客の昂揚を目の当たりにした時、音楽や映像が人の心に訴えかける力の強さ、国も民族も越えて感動を呼ぶ ROVO and SYSTEM7 の音楽性の高さ、そして手塚治虫という漫画家の偉大さを改めて感じました。

終演後…

アンコールを終え興奮冷めやらぬ観客が物販に殺到し、CD が飛ぶように売れていきます。それが落ち着くと、スタッフが Legacy の扉前に椅子と机をセッティングし始め、机の上には金色のサインペン。会場の外では CD やポスターを握りしめたまま帰らない観客をスタッフが並ばせていきます。その数 50 人以上はいたでしょうか。皆、サインをしてもらうのを待つ人々です。すぐに出演者を呼んで来なくてはと焦る私に、「並ばせて待たせるのが台湾スタイルだから大丈夫」「待たせるのは構わないから出演者全員出てきて欲しい」と台湾スタッフ。郷に入れば郷に従えでお任せし、プロジェクト始まって以来の初めてのメンバー全員が揃ってのサイン会となりました。るみ子さん、ROVO メンバーと System 7 の 2 人はひとりひとりと言葉を交わしながらサインをしま



す。その表情は、アジアツアーを終えた充実感で最高に輝いていました！

終わりに

ライブ翌日には、るみ子さん、勝井祐二、System 7 を残し、メンバーとスタッフが帰国。残った 4 人は、取材や CD ショップ視察、書店訪問などのミッションをこなし、2 日後に帰国しました。トークイベントでの Face to Face の交流、ライブ会場で生まれた大きなうねりと一体感と感動は出演者、スタッフ、そしてお客様の心にしっかりと刻まれたと思っています。

このように良い形で事業を終了できたのも、多くの方のご支援、ご協力あつての事です。(公財)交流協会台北事務所、アーツカウンシル東京、台湾東販、台湾日本人会、台北市日本工商会、手塚プロダクション他、各機関の皆様、台湾側プロデューサーとして日台の間に立って最も苦労したであろう陳世興氏、深靛感官創意工作室の陳大樹氏、トークイベントで通訳を務めた葉山青子さん、素晴らしい写真家 Fredrick Liu、広報活動に奔走してくれた One Love の David、いろいろと融通を利かせてくれた Legacy の Arthur、ツアーに同行取材してくれた日本の雑誌『Lj』の菊地崇氏、機材や楽器の運搬に尽力くださった星光旅行社…挙げればきりがありません。すべての皆さんに、この場を借りて感謝申し上げます。多謝、再見！

<関係者の言葉> ~ ~ ~ ~ ♪ ♪ ♪

♪手塚治虫の『火の鳥』がもとに誕生したプロジェクト、Phoenix Rising のアジアツアー最終公演を、アジア圏でもっとも日本のマンガ文化に関心が高い台湾で実現できたことは、たいへん喜ばしいことでした。

マンガではよく知られる『火の鳥』が、ダンスミュージックと VJ 映像の融合というまったく新たな表現として披露されるこの公演では、台湾の

音楽ファン・手塚ファンに体験したことのないエキサイティングなライブ体験を楽しんで貰えたかと思います。

さらに今回の公演では、台湾における音楽・マンガといったカルチャーシーンにも触れ、そこで活躍するクリエイターたちと交流することで、この国のじつにエネルギーで創造力あふれるオリジナルセンスに、大きな刺激を受けました。

ただ一方的にパフォーマンスを届けるに終わらず、互いの感性を刺激しあえた台湾ツアーの成功は、今後このプロジェクトが世界へと躍進するうえで、何より大きな励みになったと思います。

いつか台湾のクリエイターたちとも手塚作品でコラボレーションをしてみたい。そんな新たな夢も生まれました。あらためてこの機会を与えて下さったことに感謝いたします。

手塚るみ子 (Music Robita)

♪台湾へは一度は行ってみたいと強く思っていたので、この企画が計画された時はとても嬉しかったです。実際に台湾に来てみると自分が台湾の事を知らなさすぎた事に気付き、もっと知りたい理解したいと思うようになりました。日本の中から眺めているだけでは分からない事ばかりだと強く感じています。

日本に於いて、ROVOのバンドサウンドによるダンスミュージックと、「踊る」という参加の仕方をするお客さん達との関係性は、18年前にROVOを始めた時から先例が無く、小さな地下のクラブで始まったこの関係性は当時始まったばかりのフジロック・フェスティバルなどの野外ロックフェスティバルへと場所を移しながら、お互いに新雪に足を踏み出すように道なき道を歩いて来ました。

台湾でも僕らのようなバンドサウンドで「踊る」というお客さんの参加の仕方は、あまり先例がなかったのかもしれませんが、しかし、ライブが進行



して行くに連れて、会場の皆さんが「踊る事」に気付いてくれたような瞬間が有って、大きな感動を共有出来たように思っています。

今回は故手塚治虫先生の「火の鳥」という作品が縁となって、昔から尊敬しているイギリスのSystem 7のお二人と、彼らとROVOを実際に結びつけて下さった手塚るみ子さんと一緒に台湾に来る事が出来たのはとても嬉しい事でした。

このように僕らがアジアに於いて台湾から第一歩を踏み出す事が出来たのは、とても大きな意味が有ると思っています。何故なら台湾はハブ的な役割をアジアの中で担っているからです。台湾からタイへ、中国へ、シンガポール、インドネシア、韓国、マレーシア、などアジアの各国へ、この一歩を更に先に繋げるべく気持ちを新たにしています。

そして大好きになった台湾にまた戻って来たいと強く願っています。今回の台湾ツアーに関わって下さった方々皆様に本当に感謝しています。ありがとうございました。

勝井祐二 (ROVO and System 7)

♪現地スタッフとの共同作業なくしては、このプロジェクトは実現しませんでした。台湾側制作スタッフ、会場スタッフの協力あってこそです。テクニカル面で困ったことはありませんでした。気持ちをひとつにしてやり遂げられました。台湾クルーの心のこもったサポートに感謝しています。

王本泰 (舞台監督)

富士山と玉山の友好山提携

日本富士山協会事務局
静岡県富士山世界遺産課 主任 秋山倫久

去る平成26年2月7日、日本富士山協会と台湾の中華民国山岳協会の間で、昨年6月に世界文化遺産に登録された富士山と台湾最高峰の玉山との「山」を媒体とした友好山提携が締結されました。

1 両山の概要

(1) 富士山

日本の最高峰で、標高は3,776m。静岡・山梨両県にまたがっています。信仰の対象、芸術の源泉としての文化的な価値が認められ、第37回世界遺産委員会において世界文化遺産に登録されました。登録の正式名称は、「富士山－信仰の対象と芸術の源泉」で、富士山域をはじめ、富士山本宮浅間大社や忍野八海、三保松原など25の構成資産があります。

(2) 玉山

台湾の最高峰で、標高は3,952m。周囲は台湾自然生態保護区、玉山国家公園に指定されている。台湾のほぼ中央部に位置し、南投県・嘉義県・高雄市にまたがっており、日本統治時代は「新高山」と呼ばれていました。



①富士山と美保の松原

2 両協会の概要

(1) 日本富士山協会

静岡県、山梨県及び富士山周辺の市町村、観光協会、企業等で構成する民間団体。富士山の恵みである湧水と土壌から生まれた豊かな食の魅力を発信する「富士山 麺と食のフェスティバル」等のイベント開催や観光ガイドマップの作成等を通じて、富士山周辺のにぎわいの創出や情報発信を行っています。

(2) 中華民国山岳協会

台湾の山岳団体。政府規定に基づく山地管制区入山申請や国家公園入園申請の代行業務、公認登山指導員の派遣業務などを行い、外国人の登山活動への協力等を行っています。

3 友好山提携までの経緯

(1) 提携の提案

今回の友好山提携は、平成24年9月、日本富士山協会の堀内副会長（富士急行株式会社 取締役社長）が台湾行政院交通部観光局国際組を訪問した際に、観光局から富士山と玉山の友好提携の提案をいただいたことが始まりです。日本富士山協



②玉山の風景

会は、既に中国山東省泰安市と「富士山・泰山友好山提携」を締結していたこともあり、観光局から推薦された台湾の民間団体である中華民国山岳協会と「富士山・玉山友好山提携」に向けた協議を進めることになりました。

(2) 覚書の交換

平成 25 年 4 月 22 日、台北市内において日本富士山協会の上野事務局長と中華民国山岳協会の宋秘書長の署名により、「富士山・台湾玉山の友好山提携に向けた協議開始に係る覚書」を交換しました。覚書には、富士山と玉山、両山地域の様々な分野における交流と協力をうたっており、本提携への基礎を築くことができました。

(3) 草の根交流会の実施

覚書交換後の平成 25 年 8 月には、台湾で草の根交流として玉山国家公園管理处への訪問や玉山山麓の散策を行い、両協会は交流を深めてきました。

4 友好山提携調印式

平成 26 年 2 月 7 日、山梨県富士吉田市のハイランドリゾートホテル&スパにおいて「富士山・玉山友好山提携」の調印式を開催しました。調印式は、両協会や静岡・山梨両県の関係者のほか、公益財団法人交流協会の小松総務部長や台北駐日経済文化代表処横浜分処の粘処長、台湾観光協会東京事務所の徐副所長が見守る中で行われました。

協定書の署名者である日本富士山協会の庄司清和副会長（株式会社時之栖 代表取締役会長）は、「今回の友好山提携は、日台の友好において意義深いものであり、各分野での交流と発展を期待している。」と挨拶。中華民国山岳協会の何中達（かちゅうたつ）理事長も、「台湾にとっての玉山は、日本人にとっての富士山と同じであり、どちらも一度は登ってみたい山。これからも双方の交流を深めていきたい。」と語りました。

両協会が締結した協定の内容は、①両山地域の自然、文化、歴史、産業等の分野における交流と協



③協定書を交わした後、記念品の交換として中華民国山岳協会何理事長から日本富士山協会庄司副理事長に玉山の掛図が贈られた。

力を積極的に推進する、②相互に情報を提供するとともに、相手方の情報についても双方にその魅力を発信するなど連携し、両山地域全体の情報発信力を強化する、③両山地域住民同士の相互理解を深め、友好関係を将来に向かって一層発展させていくため、相互の訪問交流を活発に行うとともに、特に登山、観光分野での協力を推進する、というものです。

5 協定締結後の交流

協定締結後の交流の内容としては、両協会のホームページや観光パンフレットに富士山・玉山の紹介を掲載するほか、日台の相互訪問交流を行っていく予定です。既に平成 26 年 3 月には友好山提携記念ツアーを行い、日本富士山協会のツアー団が玉山周辺や台北市等を訪問し、中華民国山岳協会のメンバーと親睦を深めています。また、8 月には、中華民国山岳協会の訪問団が富士登山を行うとともに、静岡県・山梨県の富士山周辺地域を訪れる予定です。

今回の友好山提携は、日本と台湾の交流の架け橋として大変意義深いものとなりましたが、両協会の交流に留まることなく、日台の山岳団体や文化団体等とのつながりを広め、民間交流の拡大を推進してまいりたいと希望します。

台湾内政、日台関係をめぐる動向（2014年2月上旬-4月上旬）

兩岸サービス貿易取決めの審議をめぐる混乱

石原忠浩（台湾・政治大学国際関係センター助理研究員）
（元（財）交流協会台北事務所専門調査員）

兩岸サービス貿易の自由化を促進させる「兩岸サービス貿易取決め」の立法院における審議をめぐり、同取決めに反対する学生らが3月中旬から約3週間にわたり、立法院の議場などを占拠する事件が発生し、その間学生側の呼びかけに3月30日には50万人が抗議活動に参加し、現政権の施政に対し反対の声をあげ、内外の注目を集めた。その後、4月10日に学生らは立法院から平和裏に退場した。

1. 兩岸サービス貿易取決めの審議をめぐる混乱

（1）取り決めの締結とその後の経緯

兩岸サービス貿易取決め（中国名：海峡兩岸服務貿易協議）は、2013年6月21日に上海で兩岸交渉窓口機関の第9回トップ会談で締結された中台間のサービス貿易に関する制限を段階的に減少させ、自由化と協力関係を促進させるものである。同取決めによると中国は台湾に対し80項目、台湾は中国に対し64項目で開放するとされている。

同取決めは、2010年に締結されたECFAの後に続き、全面的な中台経済交流の促進に資するものと説明されてきた。一方で、台湾側では美容、医療、旅行、出版など価格競争で劣るとみられる業界及び彼らの意向を受けた民意代表が激しく抵抗し、取決めに採決する手続きをとる立法院では、審議が進まない状況にあった。馬総統は、「台湾経済がアジア経済統合の流れに乗るか周辺化されるか重要な指標になるものであり、RCEP、TPP加盟に向けての重要な試金石になる」として2月からの新会期での批准をめざしていた。

（2）議事混乱と学生の立法院占拠

立法院は3月17日、同協議の審査を行ったが、同協議に反対する民進党ら野党の妨害に対し、同

案を審査する内政委員会召集委員の国民党籍の張慶忠委員が時間切れを理由に委員会での審議を一方的な打ち切りを宣言し、同案を表決に送付する手続きをとったことで同委員会では小競り合いの混乱が生じた。国民党は今措置に対して、4月中にも表決できる見通しがついたとして自信を見せたが、民進党は違法な手続きであり、表決を阻止するため徹底した焦土戦を展開すると強調した。

翌18日夜、同貿易取決めに反対する学生及び民間団体の一部関係者の数百名が、警察らの警備網を突破し、立法院に侵入し議場などを占拠した。台湾メディアは、台湾の国会史上初の学生による議場占拠事件として19日の当地各紙は一面トップで報じた。王金平院長は「国会の尊厳を防衛する必要がある」と強調したが、強制排除などの強硬手段をとらなかったこともあり、立法院の周辺には学生を主体とした数千人規模の支持者が集まる事態となった。また民進党は蘇貞昌主席、蔡英文前主席、謝長廷元主席ら要人が議場外に集まり、学生を声援するとともに「全国民で立法院を包囲しよう」と呼びかけた。なお、同日から、今回の学生による抗議活動では立法院の議場の講演台にひまわりが掲げられたことから、「太陽花学連」（ひまわり学生運動）と呼称されるようになった。

馬総統は当初、「国会事務は国会の自主性を尊重する」としていたが、学生による議場占拠の長

期化が予想される中で、事態打開のため、江宜樺行政院長、王院長らと対策会議を開催しようとしたが、王院長は「今回の事案は国会における争議であり、総統府、行政院とは無関係であり、問題の核心は議会内の与野党間の問題である」と指摘し、馬総統に対し「民意に耳を傾ける必要がある」と強調するなど、与党内の足並みの乱れを暴露した。台湾各紙は、王院長は前日、同人の党籍確認裁判の一審判決で勝利したことから、王院長による馬総統に対する「倍返し（加倍奉還）」であるとするなど第二部「馬王之争」と称する権力闘争の始まりかと論じ、国民党の実力者や現職の県市長は傍観して次の動きを見極めようとしているなどと報じた。

一連の取決めにかかる問題に関して、有線テレビの『TVBS』は3月20日から21日にかけて世論調査を実施した。サービス貿易取決めについての理解度についての設問に対する調査では、昨年10月末の調査に比べて、「良く理解している」（清楚）が、15ポイント上昇し31%となり良く分からない（不清楚）は16ポイント減少し69%となったが、依然として台湾住民の7割が同取り決めの内容を余り理解していないことが明らかになった。（表1）

表1 两岸サービス貿易取決めの内容に対する理解度

	20131028	2014321	20140331
良く理解している	16	31	37
良く分からない	85	69	63

資料元：TVBS「訪問主題：兩岸服貿協以及佔領立院事件民調」（2014年3月21日）
http://home.tvbs.com.tw/static/FILE_DB/PCH/201403/20140321224523298.pdf 等

表2 两岸サービス貿易取決めに対する支持度

	20131028	20140321	20140331	20140403
支持する	32	21	35	30
支持しない	43	48	42	43
意見なし	26	31	23	27

資料元：TVBS「訪問主題：330 黒衫軍凱道集會後反服貿學運民調」（2014年3月31日）
http://home.tvbs.com.tw/static/FILE_DB/PCH/201404/20140401141358351.pdf 等

两岸サービス貿易取決めに対する支持度は、「支持する」が昨年10月末の調査に比べて11ポイント下落したのに対し、「支持しない」は5ポイント増えて48%となり、「支持しない」との差が拡大した。（表2）

国民党籍立法委員が同取り決めの審査を強引に打ち切ったことへの不満を発端に始まった学生による議会占拠事件への見方については、「支持する」が「支持しない」を13ポイントも上回った。（表3）

事態打開のために、政府は22日に江行政院長が自ら抗議学生が占拠している立法院周辺の集会場を尋ね、今運動の学生側のリーダーと公開対話に応じたが、学生側が「サービス貿易取決めの即時撤回」、「今会期内に两岸協議監督メカニズムの法制化」を提出したのに対し、江院長は「監督メカニズムの制定に関しては、王院長の同意を得ている」と前向きな姿勢をみせたが、取決めの撤回に関しては、立法院で同取決めの条文を1条ごとに審査する逐条審査を行うとして、取決め自体の撤回には応じない姿勢を強調したことで、対話は物別れに終わった。対話終了後、江院長は「台湾の競争力を弱めることはできない、反中の態度を取り続けているは、国際社会の経済統合の波に乗

表3 学生が立法院を占拠していることへの支持度

	2014年3月21日	2014年3月24日	変化
支持する	48	51	+ 3
支持しない	40	38	- 2
意見なし	12	11	- 1

資料元：TVBS「訪問主題:学生佔領行政院事件民調」(2014年3月24日)

http://home.tvbs.com.tw/static/FILE_DB/PCH/201403/20140324223108658.pdf 等



3月21日夜、立法院の建物に独立派団体が「中国の政党、台湾を売り渡す院」との紙を貼り付けた様子



り遅れることになり、台湾の将来にとって大きな障害となる」と従来の立場を強調した。一方学生側は、江院長との間では意思疎通が不可能とみなし、馬総統が直接対話に乗り出すべきであると主張するに至った。またこの頃から学生による抗議活動は中南部にも飛び火し、台北における活動の呼びかけに応じた中南部の学生は台南、高雄などで国民党党部を包囲するなど、抗議活動は立法院占拠後5日目にして全国に広がることとなった。

(3) 強硬派の学生らによる行政院侵入事件

江院長と学生の対話が不調に終わった翌日、馬総統は総統府で記者会見を開催し、学生の抗議活動に一定の理解を示しながらも、改めて従来の立場を強調し、学生に対して早急に立法院から退出し、議会運営を回復するよう促した。

しかしながら、馬総統の記者会見の内容は学生の期待や要求とはかけ離れており、結果的に火に



3月22日立法院周辺の様子

油を注ぐ結果となり、同日夜、数百名の強硬派の学生らが率いた集団が行政院に侵入し、その後一時的に最大2-3千人が同敷地及び庁舎内を占拠し、公共物を破壊するなどの狼藉を働く、騒擾事件が発生した。侵入事件は同日夜半には、警察によって排除され、その過程で10数名を現行犯逮捕したほか、50数名から事情聴取を行ない、20人前後が負傷し病院に収容されたと報じられた。今事件に対し、総統府、行政院は暴力行為を譴責す

るとともに対応に追われ、政府機関の警備を強化することを余儀なくされた。翌日、江院長は記者会見を開き、行政院侵入事件について説明するとともに、「公権力を行使しないことは国民に申し訳が立たない、行政院が外来勢力により占拠、破壊することは許されない」と警察力を行使して抗議関係者を排除した正当性を強調した。

世論は、行政院侵入事件について如何なる評価をしたのであろうか。事件翌日に『TVBS』が実施した世論調査では、行政院への侵入、一次占拠事件については、「不支持」が過半数を上回る 58% を占め、「支持」の 30% を大きく上回った。一方で、立法院の占拠については、3 日前の調査と比べ微増ながら、占拠を支持するが 3 ポイント増える結果となった。また「馬總統は（記者会見等の方式ではなく）直接、抗議学生と意思疎通すべきか否か」の設問に対しては、「直接意思疎通すべき」が 83% を占め、台湾住民の 8 割以上が馬總統が記者会見を通じて自らの主張を一方的に訴えかける手法に疑義を呈する人が多いことを示す厳しい結果となった。（表 4）

学生による行政院侵入事件の翌 25 日、馬總統は、膠着状況の打開のために学生との対話を要請し、總統府は学生代表に正式な書簡を送付し、前提条件なしでの対話を行うことを提案し、学生側も一時的に「善意の表れとして」好意的な対応を示した。また、中国と経済交流の進展に期待する商工団体、経済界のリーダーなどからは、サービス貿易取決めに対する支持の表明も見られた。

表 4 学生が行政院に侵入したことに対する支持度

	2014 年 3 月 24 日
支持する	30
支持しない	58
意見なし	12

資料元：TVBS「訪問主題：學生佔領行政院事件民調」（2014 年 3 月 24 日）

http://home.tvbs.com.tw/static/FILE_DB/PCH/201403/20140324223108658.pdf 等

（4）50 万人規模の抗議活動とその余波

馬總統からの学生側に対する対話の呼びかけで、事態收拾に向かうかにみられた情勢の中で学生代表は 27 日、「政府側には歩み寄りの姿勢が見られない」として、「30 日に總統府前の凱達格蘭（ケタガラン）大道に黒いシャツを着て集合し、抗議集会を開催する」と表明した。その一方で、抗議学生とは異なる声もあるという脈絡から、国民党関係の組織などが中心となり、サービス貿易取決めに支持する「反反服貿活動」を 29 日に台北駅周辺で行うと表明した。支持者たちは、母の日の象徴であるカーネーションをシンボルに掲げたことから、当地新聞は「カーネーション対ひまわり」との見出しで紹介した。

翌 28 日は学生側のリーダーである林飛帆、陳為廷らが学生側の主張を訴えるため、それぞれ、政府に批判的な立場をとる『年代』、『三立』テレビの夜の時事討論番組に出演し、支持を訴えた。その一方で学生の抗議集会に先じる形で 28 日に江院長が記者会見を行ったほか、29 日に馬總統が政府の立場を説明する形で応えようとした。

29 日に行われた馬總統の記者会見は、23 日の会見と同様に学生の抗議活動に関し理解を示しながらも、学生側が主張する 4 項目①サービス貿易取決めの撤回②兩岸協議監督メカニズムの立法化③公民憲政会議の開催④先に兩岸協議監督メカニズムの立法化を行ってから、サービス貿易取決めの審査を行うことについて回答した。

馬總統は②については、立法院の今会期においての立法化を目指し、主管機関の大陸委員会が具体的な内容を示すとした。④に関しては立法化と取り決めの審査は同時進行できると指摘して、どちらが先であるべきかは特に言及しなかった。③に関しても「経済貿易国是会議」など行政院は全体的な評価をしながら、世論の声を反映させる枠組みの構築を前向きに検討しているとして、肯定的姿勢を示した。しかし、①については、台湾サー

ビス業の振興、台湾経済の活力の確保、アジア太平洋地域の経済統合の流れに加わるためにも必要であり、撤回はできないと強調した。同記者会見に対して、学生側は具体的な承諾事項が無かったと批判し、民進党も蘇主席が「馬は抗議活動を終わらせることだけを考えており、問題の本質を解決しようとしていない」と批判した。

また「他の世論の声」として、サービス貿易取決めに支持する人々らによる活動も行なわれた。右活動には、今回の騒動で疲弊し、批判をされている警察関係者の家族、抗議活動に反感を抱く学生及び民衆ら約6千人が、同日午後中正紀念堂の自由広場に集結し、カーネーションを掲げ、警備に当たる警官らに感謝の意を述べるなどし、反対派の学生らに対し「子供たちよ、家に帰ろう」との呼びかけを行なった。更には、学生や社会人を中心としたサービス貿易取決めに支持の集団は、「反取り決め」の学生らが黒シャツの服装で揃えたのに対し、白いワイシャツ姿で、約4千人が台北駅周辺に集結、「国会を還せ、台湾を護ろう」などと国旗を掲げスローガンを叫び、立法院を占拠する学生らに議場からの退出を要求するところがあった。支持派が国旗を携えて活動を行なったことは、立法院占拠の学生らは「独立派」、国旗を掲げた彼らは「統一派」という構図が見え、台湾における「統一か独立か」といった問題を想起させることとなった。

翌30日、サービス貿易取決めに反対する学生が呼びかけた抗議活動に支持共鳴する民衆は同活動のシンボルとなった黒いシャツを着て、総統府前のケタگران大道付近に集結し、政府に対し、取り決め撤回等の主張を繰り返し叫んだ。活動の総指揮を執る林飛帆は会場で演説し、「今活動に50万人（注：警察当局の発表は11万6千人）が集結した。我々の行動は台湾の歴史上消すことの出来ない一ページを記した」と成功を高らかに宣言するとともに、政府に具体的な回答がないとして、

引き続き立法院を占拠すると説明した。当日、現場に赴いた筆者は地下鉄の最寄り駅から現場に向かったが、駅の混雑緩和のため入場制限の措置がとられていた。抗議に参加した人々は中世紀念堂の自由広場などに座り込み、勝手流の小フォーラムが多数開催されており、その中には蔡英文前主



3月30日中正紀念堂の民主広場に座り込む蔡英文



3月30日抗議活動の様子

席の姿も確認できた。同日の抗議集会は夜には混乱もなく終了した。一方で取決め支持派の「白シャツ集団」も前日に続き「異なる主張の存在」を強調し、千人余りが国旗を掲げて、学生らに対し議場からの退出を呼びかける場面も見られた。

馬総統は、今回の活動に対し「平和的、理性的な活動だったことを肯定するとともに、学生は憲政体制を遵守し、早期に立法院から退出するよう」呼びかけた。民進党は蘇主席が、「今回 50 万人がサービス貿易取決め反対のために集結し、反対の声をあげ、平和裏に抗議活動が終了したことは、台湾民主の成熟度を示すものと肯定する」と指摘し、馬総統に対して「即座に民意に応え、具体的な承諾を示すべきである」と強調した。

翌 31 日、馬総統は商工団体関係者と会見した際に、学生の要求に応える形で協議監督メカニズムの法制化につき関連法案を今週中にも立法院に送付するとし、学生への歩み寄りを見せたが、取決め自体の撤回はできないと強調した。同日、『TVBS』は抗議活動に関する世論調査を公表した。馬総統の施政に対する満足度調査に関し、「満足」は 2 月時の調査と同様の 14%と下げ止まったものの、「不満足」は 7%上昇の 72%となった。サービス貿易取決めの内容への理解については、「理解している」が 10 日前の調査に較べて微増し 37%となったが「良く分からない」が依然として 63%と高い水準で推移している。(表 1) 取決めに対する態度は、「支持する」が 35%と微増し、昨年 10 月調査時の水準を上回った。(表 2) また学

生側が主張する「監督メカニズムの法制化後に取決めの内容を審査する」との主張と馬総統の「審査と法制化を同時進行すべき」主張に対しては、「学生側の主張を支持する」が 59%を占め、「馬総統の主張を支持する」の 27%を圧倒した。

学生は引き続き立法院を占拠すべきか否かに関しては、「離れるべき」の 48%が「占拠を継続すべき」の 38%を上回った。同調査からは、台湾の世論は、取り決め反対の主張が一方的でなく、抗争の長期化も支持しないが、馬総統の姿勢や主張に疑義を対する見方は多く、台湾社会の微妙なバランス感覚が感じられる。

(4) 王金平院長の調停と学生側の立法院からの撤退

4 月 1 日、貿易取決め支持を主張する「白狼」と呼ばれる元暴力団幹部関係者（張安楽）に指揮され統一を主張する政治団体関係者数百名が立法院に押し寄せ、学生代表との対話を求めたが、成功せずその間に警備の警察や学生らと、小競り合いになる事件が起きた。抗議活動の長期化は、「支持か反対か」をめぐり、中国との関係のあり方も含め台湾社会の亀裂を生じさせる可能性を示唆する論調も垣間見えるようになった。

『TVBS』が 4 月 3 日に行なった調査では、貿易取決めに関しては、3 日前の調査に較べて支持は微減し 30%、不支持が 43%となった。(表 5) 同調査は更に詳しく支持と不支持の意向と政党支持傾向との関連調査も行った。サービス貿易取決め

表 5 サービス貿易取決め支持と政党支持傾向の関係

	全体 (100%)	政党支持傾向			
		民進党 (18%)	国民党 (18%)	中立 (58%)	その他 (6%)
支持する	30%	9%	73%	23%	30%
不支持	43%	79%	9%	41%	52%
意見なし	27%	13%	18%	36%	18%

資料元：訪問主題：「反反服貿」前進立法院後、反服貿學運民調『TVBS』（2014 年 4 月 3 日）

http://home.tvbs.com.tw/static/FILE_DB/PCH/201404/20140407101158857.pdf

に関して民進党支持者の約8割が不支持である一方で、国民党支持者の7割以上が支持となった。しかしながら、中立と称する特定の支持政党なしの人々は不支持が支持を約20%上回ったことは、「国民党支持者支持、民進党支持者反対」という基本構造は確認できるが、中立や無党派層に反対が多いことが、今回の活動がここまで広がりを見せた原因であることが理解できる。

学生の抗議のあり方についての調査では、三択の中から「抗議を終わらせるべき」が最多の33%、次に「引き続き立法院を占拠すべき」が26%で続き、最後に「立法院から場所を移して抗議を継続すべき」が23%という結果となった。

4月3日、江院長は行政院版の協議監督条例を立法院に送付したが、同時に野党や民間有識者から提出された条例草案の中には、兩岸関係を明確に「中国と台湾」と記すなど、国と国の関係を示す内容があったため、「中華民国憲法に背き受け入れがたい」との批判が出された。一方で学生側からは行政院版は納得できないと批判するなど、協議監督条例の内容をめぐる対立は避けがたいことを予測させた。

台湾では4月4日から6日は清明節を含む三連休となったが、その最終日に大きな動きがあった。3月18日の学生による議場占拠以後、事態収拾に積極的に動いていないとの批判を受けてきた王院長が与野党含む30名余りの立法委員を率いて立法院に赴き、議場に入る前に「兩岸協議監督条例が立法化する前にサービス貿易取決めの審議は行わない」と表明した。その後、王院長らは議場内に入り、対話ではなく視察という形で学生側のリーダーらと握手、挨拶を交わす場面が翌日の各紙で報じられた。この王院長の行動に対しては、学生側が主張する「先に監督メカニズムの法制化ありき」の主張と合致することで歩み寄りを見せたと報道された。

王院長の行為に対しては、国民党籍の立法委員

からは従来の立場からの転換であるとして、「国民党立法院団は王院長に売られた」感じがすると苦言が呈されたが、民進党の蘇主席は、王院長の行動を肯定するとともに、馬総統に対して民意に耳を傾けるべきだと強調した。学生側も王院長の声明に対して、「台湾で希望の光が見えてきた」と評価するところがあり、学生側の議場からの撤退の可能性が見えてきたと報じられた。王院長の今回の行動は、昨年9月の政争において桃園空港で立法委員らを従えて馬総統に対する反撃演説を行ったシーンを想起させたことから、王氏の「逆転勝ち」に向けた始まりであるのかと論じるコラムも見られた。

翌7日、馬主席は国民党の会合で王院長の主張と自身の主張は衝突しないとの見解を示し、前向きな態度で事態の推移を見守ると表明したが、江院長は政府機関が実施した世論調査を根拠に、国民の多数が「先に立法、後に審査」という順序を望んでいるわけではないと強弁し、立法化と審査の同時進行を望む旨表明した。国民党立法委員からは、馬主席は王院長と十分な意思疎通をはかるべきであるとの主張がなされた。

このような状況の中で同日夜、学生代表は立法院議場で記者会見を開き、「今日まで21日間、国民の支持と参加を得て達成できた今回の運動の成果は驚くべきものがあった。今時点で我々は責任ある判断をし、10日18時に立法院から退場する」と表明した。右会見後、馬総統はすぐに「学生達が国会の正常運営を回復させる決定をしたことは、大多数の国民の期待に合致するものである。与野党の立法委員は民意を理解し、兩岸協議監督メカニズムと兩岸サービス貿易取決めが今会期中に法制化することを望む」と表明した。

10日夕刻、学生らは事前の予告どおりに夕方6時に立法院から活動のシンボルとなったひまわりを掲げて退出し、24日間に渡る議場占拠は集結した。退出時に立法院周辺では約2万人が出迎え、

引き続き同日夜には集会が開催され、学生代表らは「議場からの撤退は抗議活動の終わりを意味するのではない、次の戦いは社会において展開され、必要な時には我々はここに戻る」と抗争の継続を訴えた。

(5) 今後の展望

兩岸サービス貿易取決めの審議にかかる混乱に端を発した学生による立法院占拠の抗議活動は、現段階では平和裏に終幕した。次の争いの場所は、立法院に移ることになった。今後は、兩岸協議に対する監督メカニズムの法制化が焦点となるが、行政院側と野党、民間側が求める内容には大きな隔たりがあり、その溝が埋まるか否かは予断を許さない状況である。

台湾社会に深い共鳴を引き起こした今回の抗議活動の背景には、重層的で複雑な背景があり、簡単な結論を下すことは避けねばならないが、少なくとも馬政権の施政に対する不満、中国への不信感及び恐れがあったのは間違いないであろう。前者は貧富の格差の拡大、悪化する青年層の雇用問題に代表される。後者は、中国に経済、軍事面で飲み込まれるという恐れ、自由民主社会とは無縁の政治体制に対する不信感に収斂されるのではないだろうか。これらの問題は、短期間で解決できる問題ではないが、台湾社会の発展に絶えずつきまとう問題であり、今後も引き続き注意していく必要がある。

2. 次期統一地方選挙

(1) 選挙概要

2014年は選挙の年である。11月29日に投開票が実施される選挙は、総統選挙、立法委員選挙を除く地方の首長、議員などが全て改選され、台湾選挙史上最大規模、選挙参加者が最多となる選挙である。2月10日付『聯合報』は特集を組み「七合一選挙」と称される統一地方選挙について紹介

している。今選挙で選出される公職は、最も注目される直轄市長（台北、新北、桃園、台中、台南、高雄）をはじめ、直轄市議員375、県市長16（県長13、省直轄市（基隆、新竹、嘉義）3）、県市議員533、郷（鎮、市）長198、郷（鎮、市）民代表2095、全国村（里）長7853の計11076人が選出される。有権者は、戸籍によって投じる票が異なり、直轄市及び省直轄市戸籍者の台北市民、新竹市民の場合は、市長、市議、里長の3票、右意外の13県市の戸籍者は、県市長、県市議、里長のほか、郷（鎮、市）長、郷鎮市民代表の5票を投じる。

次期統一地方選挙は、性質は異なるものの2016年に予定されている立法委員選挙、総統選挙を展望する上でその時の与野党双方の勢いを示すことになり、疑いなく今年の藍緑陣営が最も力を注ぐ政治イシューである。国民党は、王院長が「北部で安定した戦い、中部を固守し、南部で突破を狙う」（「穩定北部、固守中部、突破南部」）とのスローガンを掲げた。優勢な北部で安定した戦いを行い、中部も大票田の台中市などをしっかり確保し、弱い南部で躍進したいということになる。民進党は蘇主席が「南部を固め、中部で逆転し、北部に前進する」（鞏固南臺灣、扭轉中台灣、前進北台灣）とのスローガンとともに直轄市長、県市長ポストの過半数獲得を目標に掲げた。現段階の民進党の調査では、現在同党が執政している6県市はかなり優勢であるが、新北、台中等6県市で膠着状態にあると分析している。基本的な有権者の構造は北部国民党、南部民進党に大きな変化はなく、今回も両党が重視しているのは、台中をはじめとした彰化、南投などの中部地域であるとされている。夏前には最も注目される台北市をはじめ、ほとんどの県市で候補者が確定し、秋から本格的な選挙戦に突入する。

(2) 台北市長選挙の動向

「首都」台北市長選挙の本命と見なされてきた、

連戦元副総統の子息連勝文が2月24日に出馬宣言を行なった。出馬宣言の際には、馬英九市長時代に副市長を務めた欧晋徳・台湾高鉄理事長はじめ、政財学界の有識者が台北市顧問団に名を連ね施政への自信を示したほか、選挙の主軸を「振興西区」とし、101ビルなど近年再開発などにより発展が目覚ましい「東区」に較べて、問屋街など古い町並みが残るが開発が遅れているとされる市西部地域である「西区」の振興を掲げた。出馬宣言の際には、もし自分が当選すれば市長の給与は、全額公益団体に寄付すると説明もされた。

連氏の出馬宣言に対して、無所属候補として出馬を模索している柯文哲医師は、連氏が市長給与の全額寄付を強調したことに対して「彼は（金に苦勞していないから）給与など必要としていない。私は給与で生活している。妻は住宅ローンを心配している。」と庶民性をアピールするとともに、「連氏は、出自が特権階級というレッテルを覆せるであろうか」と揶揄した。

『聯合報』が同日公表した世論調査では、連 VS 柯の直接対決時の支持率は45対39と連氏がリードしたと報じた。台北市長選挙は、過去の選挙の経験から、藍軍陣営が分裂しない限り、優勢であり、国民党の公認候補=市長に近い人物となるイメージが強く、その中でも連勝文は強い候補と見なされてきたが、『TVBS』が3月上旬に公表した世論調査では、国民党内の第二の候補も虎視眈々と党公認候補争いに加わっていることが証明された。同調査では、藍緑陣営の有力候補同士での対比調査を行った結果、国民党は連氏と丁守中立法委員が接戦を演じており、更に柯文哲氏との支持率も拮抗している結果となった。（表6）丁委員は、2006年の台北市長選挙の際にも予備選に出馬したが、その時は郝龍斌現市長、当時の副市長葉金川と争い惜敗しているが、今回の選挙でも最も早くから出馬表明している台北市選出、立法委員を7期務めるベテラン委員である。なお国民党か

表6 藍緑陣営における台北市長候補の対比世論調査

候補者	支持率
連勝文（国）：柯文哲（無）	43：42
丁守中（国）：柯文哲（無）	42：42
連勝文（国）：柯文哲（無）： 顧立雄（民）	44：40：3
丁守中（国）：柯文哲（無）： 顧立雄（民）	42：41：3

資料元：TVBS「訪問主題：連勝文宣布參選台北市長後一週民調」（2014年3月5日）

http://home.tvbs.com.tw/static/FILE_DB/PCH/201403/2014030622004351.pdf

らは、他にも立法委員、台北市議が予備選に参加している。

国民、民進両党は最も注目度の高い選挙であることから、予備選に際しても候補者同士の討論会などを実施した。民進党は、3月9日候補者による公開討論会を実施し、呂秀蓮元副総統、許添財前台南市長、姚文智立法委員、顧立雄弁護士の四人が参加したが、非党員ながら、緑陣営の支持が最も高い柯文哲が参加しなかったことから、注目度、関心も低かった。国民党も4月に入ると政見説明会を開催した。

（3）台中市選挙関連

国民、民進両党が、キーポイントと見なす中部地域の選挙区で最も注目を集める台中市長選挙は、現職の胡志強市長が2月上旬に出馬表明をした後、3月に国民党内で予備選を実施し、胡市長が勝利したが、『聯合報』の支持率調査では民進党の林佳龍立法委員が過半数に近い48%の支持率を獲得したのに対し、胡市長は27%にとどまり、昨年末の調査と較べて差が広がる結果となり、現職市長の苦戦が浮き彫りになった。（表7）胡市長の苦戦の背景には、13年の長期政権のほか、地方派閥間の協力など克服すべき課題が多いのに対し、林委員の支持は拡大中であり、専門家は林委員が勝利するのは難しく無い旨論じている。

表7 台中市長候補の支持率調査

候補者	調査日	
	20131222	20140315
林佳龍	42%	47%
胡志強	36%	28%
いずれも支持しない	7%	5%
未決定	15%	20%

資料元：「林佳龍 47% 胡志強 28%」『聯合報』（2014年3月16日）頁1

3. 民進党主席選挙関連

5月に改選予定の民進党主席選挙は、2月に謝元主席が出馬表明をしたものの、本命視されている「二つの太陽」は沈黙を守った。しかし、「ひまわり学生運動」が勃発する直前の3月15日に蔡英文前主席が、満を持して出馬宣言を行なった。同宣言では「民進党に対する信頼の再建、台湾再生を理念として出馬する」と述べたほか、党が進むべき方向性として「未来性、包容力、行動力」等のスローガンを掲げた。

前主席の出馬宣言に対し、蘇主席は、「現在の三大任務はサービス貿易取決め、第四原発、統一地方選挙であり、党主席選挙の出馬問題は優先事項ではない」と煙に巻いた。謝元主席は、党主席と総統候補は仕事を分けるべきであり、もし党主席と総統候補の職務を兼務するのであれば、具体的な政策を提出し、見極める必要があると指摘した。

4月中旬に大きな動きが起きた。4月14日は党主席選挙の登記開始日であったが、同日朝に蘇主席は自身のフェイスブックで主席選挙に出馬する候補者に出馬しないことを表明した。不出馬の理由として、すでに謝元主席、蔡前主席が出馬表明をしているところ、党内団結を優先し、大局に立ち、統一選挙で勝利し、2016年に政権奪回を目指すには、主席選挙で党内の争いを激化させるのは好ましくないとの説明がなされた。同日、謝元主席も不出馬を宣言するとともに、蘇主席の決断は理解できると指

摘した。相次ぐ現、元主席2人の出馬取りやめにより、蔡英文主席の再就任が有力となった。

4. 「馬王之争」関連

(1) 王院長の党員資格裁判の判決

昨年9月、台湾政治が激震に見舞われることとなった「馬王之争」において、王院長が本人の国民党党籍存在の確認を求めた裁判で台北地裁は3月19日、国民党が党籍取り消しの判決を下したことに付き、無効であるとの判断を下し、王院長が勝訴した。同地裁は、「王氏の党籍取り消しを決議した考紀委員会の委員は、党員大会で選出される等の民意的な基礎がないことから、同委員会による党籍取り消しの決定は民法、人民団体の精神に違反する」と指摘するとともに、政治問題は政治的に解決するよう促した。

国民党内部でも同裁判に関しては、党内の団結、和解の観点から、党中央は上告をしない可能性も指摘されたが、最終的に同党は抗議学生が立法院議場から退出した4月10日に、上告する決定を下した。党中央は、「馬主席と王院長の関係云々ではなく、党内の制度と党規に従ったに決定である」との説明を行った。党の決定に対し、当事者の王院長は「尊重する」と延べるにとどまったが、党中央に厳しい姿勢をとる同党の羅淑蕾立法委員は、現在政局が混乱する中で行政院が準備している関連法案の審議は立法院における王院長の協力が必要であり、党中央の今回の決定は愚かなものであると批判した。

(2) 檢察総長の機密漏洩案と檢察総長の辞任

昨秋「馬王之争」の発端となった黄世銘檢察総長の捜査情報の機密漏洩の裁判は、台北地裁が3月21日、黄被告に対し1年2ヶ月の有罪判決を言い渡した。罪状は、捜査が終了する前の段階で、秘密情報を知りえる立場にあった黄被告が右内容を馬総統に報告したことであった。同裁判では、馬総

続や江院長も昨年秋に事情聴取を受けていた。なお台北地裁の有罪判決を受け黄検察総長は、事前に公言していた通り検察総長の辞任を表明した。

5. 反原発デモの実施

100以上の公民団体の発起による「308 原発廃止デモ」は、3月8日に台湾各地(台北、台中、高雄、台東、宜蘭、苗栗、雲林、屏東)で開催された。主催者の発表では約13万人が8県市で参加したと発表した(警察当局の推計では3万2千人)。昨年のデモ活動は、「第四原発建設停止」が主要なスローガンとして叫ばれ政治色は薄かったが、今年は年末に選挙を控えていることもあり、緑軍陣営から、蘇主席、蔡英文、謝元主席、呂元副総統、游錫堃元主席ら要人が勢ぞろいした他、国民党からは台北市長選挙に出馬表明をしている丁守中立法委員が参加したのが注目された。

6. 馬総統の東海行動規範制定の発言

馬総統は2月26日、政治大学で開催された安全保障にかかるシンポジウムに出席し、開幕式で20分間に渡り講演した。馬総統は自身が、2012年8月に提出した「東シナ海平和イニシアチブ」が、平和的方法で論争を解決する主張を提出したことに各界から評価を受けているとの認識を示すとともに、昨今の同地域における航空識別圏問題をめぐる論争に関して、「東シナ海空域安全声明」を提出し、台湾が地域の平和と安定、繁栄を促進させる一員になることを期待すると主張した。

同声明は三項目の主張から成っている。一つ目に、「東シナ海平和イニシアチブ」の精神に基づき、関係諸国は現行の国際法の原則に従うべきであり、平和的方法により論争を解決し、東シナ海空域の安全を確保し、航行の自由を護り、地域の平和を促進すべきである。

二つ目は、空域安全に直接影響のある航空識別圏にかかる各国の主張が重なっている問題につい

て、各国は迅速に二国間交渉を展開し、解決の道を探るべきであり、必要な時には暫定措置を採り、衝突と誤解を生じることを避け、航行の自由と安全への影響を減じることができる。

三つ目は、関係諸国は相互信頼、相互利益を基礎にして、共同で海域、空域を含む「東シナ海行動基準」を協議、制定し、迅速に当該地域の複数国による交渉メカニズムを確立させ、東シナ海の永続的平和と長期的な協力を促進させ、地域の安定と繁栄を増進させる。

馬総統の今発言は、「東シナ海平和イニシアチブ」の主張を改めて強調し、各国に対し対話と平和共存を呼びかける内容であり、台湾も当該地域における重要なアクターであることを対外的にアピールする狙いがある。国際法の遵守を呼びかけたのは、台湾は現状変更勢力ではなく、現状維持勢力であるとの主張を示したといえ、台湾が東シナ海、南シナ海における地域平和の枠組みに参加する意思を示すものとも見なされている。

7. 「日本版台湾関係法」推進の動きに対する反応等

2月18日の当地各紙は、前日自民党内の「日本・台湾経済文化交流を促進する若手議員の会」(略称：日台若手議連、会長・岸信夫外務副大臣)が会議を開催し、「日本版・台湾関係法」の法制化を目指すことを確認したとの報道に対し、台湾各紙では「安倍総理の実弟が日本版台湾関係法を推進」と報じた。「日本版台湾関係法」は、米国が台湾との断交後も台湾の安全保障に関与していくとして、武器供与を継続していくこと等を定めている「台湾関係法」

(Taiwan Relations Act)を意識したものである。

沈斯淳駐日代表はメディアの電話インタビューに対し、「過去に類似の議論はあったが、大きな進展は無かった。駐日代表処は引き続き動向に注意し、日台友好関係が前進することを望む」と述べた。

現在を生きるかつての「日本人」(3) —語りを通して現れた自己の解放—

佐藤貴仁 (亜細亜大学非常勤講師)
(元・交流協会台北事務所日本語専門家)

1. はじめに

現在の研究フィールドである台北市所在の高齢者向けデイケアセンター「玉蘭荘」との出会いは2008年に遡る。きっかけは、当時の勤務先であった交流協会台北事務所日本語センターが発刊していた機関誌「いろは」の編集を担当した際、玉蘭荘の活動を特集記事として取り上げ、取材したことによる。初めて施設を訪問した際に感じたことは、その場にいる会員や施設スタッフが、それぞれの国籍やルーツに関係なく、彼らの共通言語である日本語を介して、皆が生き生きと繋がっている様を目の当たりにしたことで、ことばというものが、人と人とをこんなにもダイナミックに結びつける力があるものなのか、という新鮮で素直な驚きそのものであったことを記憶している。

しかし、このような思いは、おおよその人が施設を訪れた際に、感じるものであるのかもしれない。台湾であるにも関わらず、日本語が飛び交うその空間は、訪問者にとってはあたかも日本にいるかのような錯覚を覚える場所であり、その活気に満ちた雰囲気初めて接することになったのであれば、「新鮮で素直な驚き」はごく自然と湧き上がる感情であると言えるだろう。しかしそれは、単なる表面的な玉蘭荘の雰囲気を捉えた感想に過ぎないものだと、今にしてみれば思う。なぜなら、その裏にある「なぜここに集まっている会員が、戦後を境に日常的に日本語を使用しなくなってから60年以上を経過した現在においてもなお、日本語による活動を求め、玉蘭荘という場にやって来るのか」という施設の存在理由ともいうべき部分にまで、自分の意識が及ぶことが、その時にはなかったからである。

その後、研究調査を目的として2012年3月に

玉蘭荘を再訪し、施設の会員にその人生の語りを聴き始め、関わりを持つようになってから2年余りが経過した。継続的なインタビューを行う中で、彼らが「なぜ日本語による活動を求め、玉蘭荘という場にやって来るのか」というその意味を考えてきたのだが、インタビューを行うにつれ、その意味が自分の中で変化していったことは、実感として確実に持っている。インタビューを始めた当初は、会員たちが、ただ懐かしがって玉蘭荘へ日本語を話しに来たり、日本語を話す人たちとの繋がりを求めたりしているだけでは決してないことは、直感的に感じていたが、「その裏にある何か」が何なのかということは、まったく分かっていなかったように思う。

しかし、何人かの会員に継続してインタビューを行う中で、彼らがその場所に集うそれぞれの意味が、その語りを通して何となく見えてきたことも、また実感としてある。自分の中で、おぼろげであったものが輪郭を帯び、徐々にその姿形を現し始めるという変化を感じるに伴い、インタビュー対象者と私との関係性も、少しずつ変化していった。その具体的な変化とは、インタビューにおける「聴き手」と「語り手」という関係性が、対話を続ける中で徐々に希薄となり、より対等に近い立場で、互いを認識するようになったことではないかと感じている。それは、インタビューとは一方的に話を聴き、相手がそれにただ答えるという形式的な行為ではなく、その場の2人が共に作り上げる相互的なものだという、回を重ねるごとに得た実感によって支えられている思いでもある。

そのような実感を得たことで、私はインタビューにおける「聴き手」と「語り手」という立

場自体は不変である一方、その関係性においては、常に一定であるとは限らないということを読んだ。実際にインタビューを始めた当初は、対等性ということに関して、さして意識が及んでおらず、どちらかという、単に話を聴くだけの「聴き手」として、一方的な感覚で自分自身を捉えていたように思う。だが、インタビューを重ねる中で、その意識が徐々に変化していったのもまた事実である。それは、「聴き語る」という相互行為から互いを知ることにより、両者の距離が近くなったことで、より対等に近い立場に関係性が変化するに至ったからなのかもしれない。あるいは、交流を重ねるにつれ、しだいに信頼が醸成されたことで、関係性がより対等だと思えるようになったからこそ、互いが自己を開示し始めるという変化も起きたと、考えられるだろう。もっとも、どちらの変化が先にあったかということは明解ではないが、ただ、インタビューという行為そのものが、その変化を及ぼした要因であることは確かだと言える。

互いの関係性が変化すること。それは、私自身の意識の変化を意味することでもあり、また、インタビュー対象者の意識を大きく変えたことを意味することでもある。インタビューを通じた私自身の大きな変化に関して言えば、当初持っていた「聴き手」という意識が、時が経つにつれ消失していったことが挙げられる。それは、自分を「聴き手」という立場ではなく、語りを聴く一人の「人」として、自己を認識するようになったこと、また同様に、インタビュー対象者を「語り手」という立場ではなく、一人の「人」と捉える視点を手に入れたからなのかもしれない。こうした変化は、その人生の語りを聴くことで、「インタビューの対象者」としてではなく、「生身の人間」としての彼らと向き合うことになったこと、ひいてはそれが彼らを見つめる自分自身とも向き合うという行為に繋がったことで得た実感から、生まれたもの

だと言えるだろう。

だが、私の変化もさることながら、継続的にインタビューを行った玉蘭荘の会員の中においても、その過程で非常に顕著な変化を辿った者もいる。それがどのようなものかという、インタビューを通して継続的に語るにより徐々に解放され、明るく深淵となっていくという、ある個人の身に起きた「自己の変容」とも言うべきものであった。その人とは、2008年の機関誌の取材時にも話を聴き、かつ、今を遡ること2年前からこれまでに4回のインタビューを行った李さんという台湾人男性である。本稿では彼の事例を取り上げ、語りを通じた李さんのこの2年間の変化から、インタビューを通してある人の人生の物語に



「24周年慈善音楽会での会員のコーラス」



「アコーディオン&ビオラ（賛美歌を楽しむ）」

耳を傾け、その姿を見つめることが、本人にとってどのような意味を持つのかということについて、考えてみたいと思う。

2. 李さんに対するインタビュー

2.1 出会いと再会

李さんとの出会いは、先述機関誌「いろは」の記事執筆のために、2008年10月に玉蘭荘を取材した際に遡る。その時、何人かの会員にインタビューをしたのだが、そのうちの一人が彼であった。その後、発刊された機関誌を手渡しに行った時と、2009年に玉蘭荘で講演をした際にも会っているのだが、2012年に研究調査のために再訪した際、そのことについて言及すると、これら一連の出来事はすべて「忘れまして」と言っていたことから、当時のことは、ほぼ記憶には残っていなかったようであることが分かる。

したがって、再訪時に行った2012年4月のある日の午後に行った第1回目のインタビューの際は、「ほぼ初対面」という雰囲気スタートしたが、私にとってその姿は以前の印象と変わらず、穏やかだがはっきりとした語り口の彼そのものであったと記憶している。しかしその一方で、語っている時の柔和な姿とはまったく印象の異なる彼を、私は同じ日にたまたま目にしていたことも、はっきりと覚えている。インタビューは通常玉蘭荘で行っており、その日も例外ではなかったため、午前の活動や会員の様子なども一通りのことは見ていたのだが、その日の朝に彼を捉えた私の目に映ったのは、机に向い日本語が書かれた印刷物を一心不乱に紙に書き写していた姿だった。本人は写経のごとく、単に日本語を書いていただけなのかもしれない。しかしその姿は、明らかに自分だけの世界に入り込み、他者を寄せつけない雰囲気を醸し出していた。その鬼気迫る様子から、何となくではあるが、私は日本に対する彼の複雑で屈折した思いのようなものを感じ取ってしまい、訳

もなく胸が苦しくなったことを覚えている。また、これはのちに聞いた話であったが、過去には李さんと日本人スタッフとの間に、齟齬によるコンフリクトがあり、それが何年にも渡って尾を引いた、ということもあったそうである。それは小さな誤解から生じたことであったようだが明確な理由はなく、ただ相手が日本人であるというだけで、その思いが非常に複雑な形で表出してしまった例であるかもしれないという。それはどのようなことなのだろうか。

玉蘭荘の会員の多くは、未成年の多感な時期に終戦を迎えたことで、日本統治下における「日本人」としての人生に、突如終止符を打たれた経験を持つ。それは、教師をはじめとした身近な日本人が「ある日突然終戦とともに、パッといなくなっちゃった訳でしょ。帰っちゃった訳でしょ。理解できないでしょ。だから捨てたと思われた、そう思った人も結構いるんです」と、玉蘭荘のスタッフであるAさんが語るように、日本の撤退は終戦によるものだから仕方がないと理性では理解していても、感情的には「捨てられた」体験として、心に残っている人も多いという。よって、日本人に対して複雑な心理を抱いている場合も多々あるということから、同様の経験をしている李さんも、それは例外ではないと考えられるだろう。こうしたことから、インタビュー中には穏やかに話す彼がいる一方で、時として不安定な一面を覗かせる彼がまた存在していることも、その背景を考えれば大いに理解できることだと言える。

2.2 一回目のインタビュー

2012年の4月に玉蘭荘を再訪した際に行った初めてのインタビューにおいて、私自身の意識や態度を顧みると、完全に「聴き手」として臨んでいたように思う。よって当時は、「対象からいかにして話を引き出すことができるだろうか」といったことや、「対象からどれだけ聴き出せるだ

ろうか」という考えに支配されていたのかもしれない。当然、李さんに対しても、その存在を完全に「話し手」として捉えていたため、彼のことは「研究対象」として一方的に語ってもらう人としてしか、認識していなかったようにも思う。

一方、李さんは穏やかだがはっきりとした口調で、インタビューに応じていた。初回は40分程度のものであったが、1928年生まれという自身の紹介に始まり、公学校を卒業したこと、海軍特別志願兵の第二期生だったこと、海兵訓練期間中に終戦を迎え出身地に戻ったこと、そこが原住民の多い地域だったことから、戦後も日常的に互いの共通語である日本語を話す機会があったこと、その一方で、戦後社会の言語である中国語の世界には馴染めず挫折感を味わい、寂しい人生を送ってきたこと、自分を犠牲にして子どもの教育に尽力してきたこと、今は孫とも一緒に住んで幸せを感じていることなど、事実関係に加えて自分自身の心情についても、臆することなく話してくれた。実際に私自身も、李さんが思いの外、饒舌だったことに対し、「聴き手」としてある種の手応えを感じていたことは事実である。しかし、2人の関係性という観点から考えると、互いに「ほぼ初対面」であったことには変わりはない、よってそうしたある種のぎこちなさがあったこともあり、我々は「語り手」と「聴き手」という単に立場を表しただけの関係という域から、出ていなかったと思う。実際に現在の立場で、2年前のインタビューの音声を変えて聴いてみると、上手く言葉にすることはできないが、2人の間に漂う空気には、やはり堅さやよそよそしさのようなものがあることが分かる。

2.3 李さんの変化の予兆

4月に1回目のインタビューを終えた後、すぐに行った作業は、録音した音声データを文字起こし、トランスクリプト（口述記録）作成したこ

とと、それを印刷したものを本人に郵送し、フィードバックを行ったことである。このフィードバックは、誤字や事実の正誤確認のために行ったものであったが、この行為がのちに当初の意図を超え、大きな意味を持つようになるとは、当時は思いもしなかったことである。

その後、2012年9月にあるシンポジウムが開催されることを知り、そこで李さんのインタビューを元にした考察を発表するためにエントリーをした。李さんについて何か書いた場合には、すでに送っていたトランスクリプト同様、本人に内容を確認してもらうようにしていたが、その都度印刷し、郵送するのは手間がかかるということで、先述の玉蘭荘スタッフであるAさんの配慮により、李さんにも許可を得て、電子データで原稿などを送ることになった。ちなみに、このAさんは1996年に李さんが玉蘭荘に通所するようになった当時からスタッフとして関わっている人であり、施設における彼の様子をつぶさに見てきた人でもある。

このようにして、Aさんに協力を得てやり取りを行うようになった中、Eメールでシンポジウムの予稿集を送り、李さんにその内容を確認してもらう機会がさっそくあった。その際の返事をAさんがよこしてくれたのだが、そこに記されていた李さんの様子については、こちらに対する協力的な姿勢が感じられるものであるとともに、彼の変化の予兆を伝えてくれるものでもあった。以下はAさんからのメッセージの一部である。

実は、今日お二人に確認して頂きました。(中略) すぐに読まれ、変更箇所を指摘され、内容はすべて自分が語った通りだと言われていました。僕は政治的なことは一切触れていないので...と、特には問題ない様子でした。

(2012年9月7日付メール)

「お二人」というのは、発表の際の対象者として、李さん以外にもう一人を取り上げたことによるものである。その人はインタビューを元にまとめた文章を読むと、困惑した表情で心配そうな反応を見せたという。それは、自分が語ったことを活字になったものとして、客観的に読んだことで、現れたりアクションであったのかもしれない。なぜなら戦後の戒厳令下において、本音を語ることが極端に恐れられていた時代を過ごしてきたという歴史的経緯から、自分のことを伝え、公表するということが、想像以上に負担が大きいことだということが窺えるからである。だが、李さんの様子を伝える文章からは、それを乗り越える覚悟のようなものを感じ取ることができた。

また、のちに分かったことであるが、自分が玉蘭荘の代表として取り上げられ、かつ、それが活字になったことで、ある種の自信や誇らしさを感じていたということもあったようである。私は李さんにとって、研究のために接近した人間であることに変わりはない。しかし、その語りを文章にまとめたことを通じて、結果的に彼の思いを汲み取ることができていたとすると、李さんはこの時すでに、一人の人間として私を信頼し始めていたのではないだろうか、今にして思う。それを裏付けるかのごとく、シンポジウムで発表した後、間もなく行った2回目のインタビューにおいて、そうしたニュアンスが感じられる場面があったことからそれが窺える。

だがその一方で、私はまだこの時、李さんを一人の人間として見つめる視点は、あまり持っていなかったように思う。それよりも、日本語を使用しなくなった戦後の生活において、「どのように日本語を忘れないようにしていたか」といった具体的な過去の話や、李さんが「日本語での活動にどのような意味を見出しているのか」といった、本人でさえも客観的に語るができないようなことを、どうにか直接聴き出そうと考えているよう

な状態であった。それはつまり、李さんを一人の人間として見つめ、それを受け止めるというよりは、研究を行う者として、彼を「研究対象」として眼差す視点がまざっていたことを意味する。

2.4 二回目のインタビュー

李さんは、研究者としてではなく一人の人間として私のことを眼差し、信頼を置き始めてくれているのではないかと思う語りが、2012年9月に行った2回目のインタビューの中に見られた。それは、インタビューの際、たまたま我々の近くにいた施設関係者について語られた場面におけるものだった。よって、李さんの人生の語りを聴くためにインタビューをしていた私にとって、その時のやり取りは本筋から外れたものであり、文字化はしていたものの、取り立てて注目していた箇所ではなかった。しかし、のちに録音したデータを聴き直した際、以下のやり取りがあったことを改めて認識したことで、当時彼が私を、また私が彼をどのように見ていたのかという客観的な気づきを得るきっかけとなった。

—インタビューの途中で、李さんが別の場所にいた玉蘭荘関係者を呼び、挨拶した後の場面

*：あの方は誰なんですか。

李：私が話しましたでしょう？あの、前回の訪問記ですね。あの人が欲しいと言うたんで。私は何でも返事しません。著作権の問題だから（笑）。あなたの同意がなければ、私はコピーしてあげられないですよ。

*：はい、はい。

李：あの人が一部欲しいと言うの。

*：ああ

李：私、話しましたでしょ？先日。

*：訪問記？

李：前回の// *：あ、はい//あなた送ってくれた。

*：はい、はい、はい。

李：で、私、見とったら、あの人が見たんですよ☆

*：ああ//一部欲しいだとか。

*：ああ、そうなんですか。じゃ、見ただけ、という
か見たんですね。

李：はい。ちょっとだけ見せました。

*：あ、いいえ、いいえ。大丈夫です。

李：ちょっとだけ見て、一部欲しいって。私、あんた
来たら

*：ははは、大丈夫です。え、じゃ話は戻りますけ
ど...

(2012年9月21日、インタビュー第2回目)

上記のやり取りにおいて、李さんが言及している「訪問記」というのは、シンポジウムで発表する前に、その内容を確認してもらうために送った「予稿集」のことである。この予稿集を読んでいた際、施設関係者がそれを目にし、一部分けてほしいと言ったが、私の同意がなければ渡せないということをその人に話した、ということについて語っている。自分のことが載っている原稿を書いた私に対して、「著作権の問題」があるからと言いつつ及んだその語りからは、書き手としての私に敬意を表してくれていることが分かる。そしてその声からは、自分が取り上げられた嬉しさや、私と彼という2人の間だけで行われたことに対する、ある種の秘密を共有している者同士が持つ連帯感のようなものも、何となくではあるが伝わってくるものであった。

しかし、そうしたことにはっきりと気づいたのは、しばらくしてからである。上記のやり取りを見ても分かるように、予稿集の原稿を見た施設関係者が「一部欲しいって」言っていたが、「私、あんた来たら」と私の許可を取らないで、その原稿をコピーして渡すことはしなかったと一生懸命に話す李さんを遮り、「ははは、大丈夫です。え、じゃ話は戻りますけど...」と、話を本筋に戻そうとしていることから、それが窺えるだろう。その

時もやはり私は、李さんをまだ「研究対象」として捉えていたのかもしれない。

そうした私の意識とは裏腹に、Aさんがその後の李さんの様子を伝えてくれた。それは、2回目のインタビューを挟み、李さんが「訪問記」と称した予稿集を論文化することにし、Aさんにその初稿をEメールで送った際にもらった以下の返事（一部抜粋）に記されていた。

今回の事例に、このお二人を選択なさったのは、まさにピッタリだと思います。李さんは、この事を通してかなり解放されたのでは？と感じます。

(2012年10月27日付メール)

3. 李さんの変化の意味

3.1 語る力

Aさんは、研究の対象として私が李さんを取り上げたことで、彼が「解放されたのでは」ないかと、2012年の10月の時点でメールに記して送ってくれている。実際に、2012年の9月に行った2回目のインタビュー時において、私自身も1回目よりも明るく快活な印象を持ったことは否めないことであり、またそれは、単なる印象としてではあるが、録音した音声からも伝わってくるものもあった。だが、彼の変化はこれだけではなかった。それは、李さんに予稿集を論文化したものの最終稿を確認してもらった際の様子を、Aさんがメールで伝えてくれた文章（一部抜粋）にも見て取れる。

李さんは、ご確認されて、OKとの事。また、もし佐藤さんに要請されれば、旅行のついでに、皆様の前で自分の正直な気持ちを直接お伝えしてもいいと、おっしゃっておられますよ。

(2013年1月28日付メール)

インタビューにおける自身の語りを通し、語ることでその当事者が変化していくことは、どのようなことを意味するのだろうか。それほど積極的なタイプではなかった李さんが、自分が辿ってきた人生を自らの声で、公の場において話したいと言っているという。そのような考えが及ぶに至った背景には、やはり「語り」の持つ力を意識せざるを得ないだろう。なぜならそれは、彼自身が解放され、明るく快活になっていった要因として、インタビューにおける「語り」があると考えられるからであり、そこに自分を語るということの本質的な意味が隠されているような気がしてならないからである。

一例を挙げると、インタビューという行為自体は、李さんの変化を起こすために行ったものではないが、結果的に現在の視点から過去を語るということが、これまでの自分の人生を捉え直す契機となった可能性がある。また、継続的に語りを聴き、文字に起こしたものを本人に返して見てもらうことは、改めてその内容を客観的に把握することにもなる。さらに、インタビューではあるにせよ、その語りに耳を傾ける「聴き手」という存在自体が、表出された語りを含めた「語り手」そのものを受容する者として、その意味が与えられていると見ることもできるだろう。このように、インタビューにおける「語り手」の語りを中心に取り巻く、相互的で重層的な状況がプラスに働きかけた結果、解放的で積極的になったという彼の心理的な変容に、影響を及ぼすようになったのではないだろうか。

その人の記憶をその人自身が語るることについては、ナラティブ・セラピーという心理学的療法としても、その有効性が認められている。このナラティブ・セラピーは社会構成主義をもとにした概念の一つで、自身の記憶を自由に語り、その主観的世界を新たな物語として語り手が構築する行為を通し、過去のある出来事を捉え直すことで、そ

れが語り手の心理に有効に働くという理論に基づいたものである。つまりそれは、一般的に存在していると考えられている「普遍的真理、客観的事実、絶対的価値」ではなく、自身が捉えた自分だけの「個別的真理、主観的事実、相対的価値」を自らの言葉で編んでいくことを意味する。その結果、ある経験を自らの解釈で捉えることにより、固有の意味や価値を見出すことで、問題となっている過去の出来事を乗り越える作用が働くと言われているが、これは李さんが辿った変化にも、重なる部分があるのではないか。それは、自分の過去を語ることで、いわば心の傷のようであったものが癒され、結果的にそれを乗り越える手立てになったと捉えるものの見方である。

戦後、台湾において社会の言語が日本語から中国語に切り替わった中で、これまで普通に日本語を使用してきた自分は何一つ変わっていないにも関わらず、取り巻く世界が大きく変化してしまったこと。その現実の中で、何か取り残されたような感覚から自身の存在意義が見出せなく、挫折感を味わったまま、毎日をただ過ごす日々が続いたこと。このようなある種の失望感を伴う経験を自らが語ったことで、これまで封じ込めてきた自分の過去の一部を手放すことができたのかもしれないと考えれば、インタビューや論文化にまつわる一連のやり取りが、図らずも李さんにナラティブ・セラピー的な影響を及ぼしていたと考えられるだろう。

3.2 誰かの人生に耳を傾けることとは

自分ではなかなか気づけなかった李さんならびに私自身の変容は、Aさんとのやり取りにおいて、意識化していったことも大きい。既述の李さんの変化に接するにつれ、何となくではあるが、私は自分がしていることが単なるインタビューに留まるものではないと思い始めていた。そして、「皆様の前で自分の正直な気持ちを直接お伝えし

てもいい」と話した李さんのその後の様子について記されていた A さんからの以下の返信を読んで、その思いを確かにした。

先週、李さんは、ただ正直な気持ちをお伝えしたと言われていました。佐藤さんを信頼されておられることを強く感じました。(中略) 実は、佐藤さんがこの論文で関わって下さってから、李さんはかなり変わってこられた様に感じております。心が解放され明るくなられ、益々お元気になってこられました。是非、日本行きを実現して差し上げて頂きたいです。彼のためにもプラスになると思いますので。

(2013年2月5日付メール)

これを読んで、私は誰かの人生に耳を傾けることが単なる「聴き取り」ではなく、その語りを聴き、人生の物語を共有することで、その人自身を受け止めることに繋がっているのではないかという思いを得た。そうした行為そのものが、語り手の心の解放を促す一つの要因にもなっていたのではないかと思うのである。確かにそれは、研究を通じた相互行為であることに変わりがない。しかし、インタビューを通して対象と向き合うことで、「聴き手」と「語り手」という立場を超えた、より対等に近い関係性が構築されたのではないかと感

じている。それは、インタビューとは一方的に話を聴き、相手がそれにただ答えるという私自身が当初持っていた構えが変化したことをも意味する。また、インタビューとは形式的な行為ではなく、より対等な立場で、その場の2人が共に作り上げる相互的なものだという認識も新たにされた。これらのことは、後から振り返って分かったことではあるが、李さんが一人の人間として、私を信頼してくれるようになったことや私がしばらく持っていた彼を「調査対象」として捉える視点が消えていったことは、相互行為によるものと言えるだろう。つまり、インタビューにおける「聴き手」と「語り手」の関係性の構築は、調査を円滑に行うために、より対等な立場を形成するという「目的」としてあるのではなく、互いが作り上げた「結果」なのである。

また、上記のメールに記されている「日本行き」というのは、その前に話に上った、日本へ行って「皆様の前で自分の正直な気持ちを直接お伝えしてもいい」という彼の気持ちを汲み取ったものである。結局、高齢である李さんが、一人で日本へ旅行することは家族の心配などもあり、実現することは難しくなってしまった。だが、その代わりという意味もあったのかもしれないが、李さんが自分でコースを考え、生まれ故郷の街に招待して



説明をする李さん



林業における材木運搬の様子 (当時の復元)

くれたのである。出発からずっとつきそい、幼少期に生活していた場所や戦後に解隊し、帰還してから従事していた地場産業である林業が説明された資料館などを自ら案内してくれたのだった。それは、本当に心のこもったもてなしであることが身にしみて感じられるものであった。また同時にそれが、これまでの私との関係における彼の気持ちの表れなのだろうと感じさせてくれるものでもあった。

4. 研究活動を通じた互いの在り方

インタビューを通して自己を語ることで、李さんが明るく解放的になり、ますます元気になってきたというメールを受けた後、私は実際に A さんに会い、そのことについてのインタビューを行っている。自分としては、主にインタビューによる「語り」を通して、李さんの変容が起きていたと解釈していたのだが、これまで私がしてきたことと、李さんの変化を常に見守ってきた A さんからは、また別の視点から話を聴くことができた。

私の方の立場からすれば、あの方たちの思いをこうして、日本の方が汲み取って、しっかり文字にして、そして「こうですか」「ああですか」って言ってね、きちんと対応してくれるということが大きいと思います。だって、今まで来た人、誰もそれやってくれた方いらっしやらないから。面談は受けてもね、ほとんどまったく関係ないですよ。まあもちろん、ここまで丁寧にやっていただかなかったとしてもね、そういう部分が全然、受けたことないんですよ。

(2013年9月20日 Aさんインタビュー)

Aさんによると、李さんの変化の要因として考えられることは、インタビューを通して語ったことだけではなく、むしろその後にトランスクリプトを作成して本人に送ったり、送付した後に実際

に会って、その訂正箇所を一緒に確認したりしたことが大きいのではないかと。既述の通り、台湾に存在しているにも関わらず、玉蘭荘における共通言語は日本語であり、活動はほぼすべて日本語により運営されている。このような特質を持つ施設の特異性からか、玉蘭荘を扱った論考も多数発表されている。また、会員に対する調査やインタビューも多く受け入れているというが、これまでに受け入れた人たちの中で、調査の協力をした会員に対して、文字化した資料を見せて確認した人というのはほとんどいなかった。またそれは、論文などを記した場合も同様であるという。

だから大きいいい機会だったとは思いますがね。文字にして返してあげたり、こうしてきちんとやってくださることはね、今まではただ話したのを聴いて、何も返してもらってないし、そういう人いなかったんですから。ほとんどの学者とか色んな人はね、自分ではもちろんそれで何かいい論文書いたかどうか知りませんが、私はね、現実的に生きている人やその人たちに、それがフィードバックされないって、意味ないってというか、あんまり残念に思うんですよ。今まで色々な調査とかあったけど、私、いつでもそういうことを受ける側で申し上げるのは、先生方がいい論文書かれて、それを参考になさる方たちが、色々活かされるのは、それはまた結構なことなんですけど、今、それに応じた方たちにも、ある程度フィードバックしてもらわないと。そこら辺が足りない部分として、今まで多々あったということを私、申し上げていたんですけど、ここだと余計それがね、軽んじられているというか、何か利用されてるとしか取れなくて、私、いつでも協力してあげてくださいって [会員に対して] 言うのも、ちょっと憚っちゃうようなこともあるんです。申し訳ないなあと、日本人として。だからこそ、余計強調して、踏みにじらないでいただきたい、という風に思ったりするんですよ。で、この方たちは、このことをす

ることによって、自分もメリットがあったり、自分にとっても凄くね、振り返りの学習になったとか、非常にこう、はっきりと人生の今までを捉えられたりっていうことがあったら、凄い立派な博士論文書くのも凄く大切なことだけど、もっと大きいかって私は思ってます。命ってとても大切なことだから、一人ひとりの。

(2013年9月20日Aさんインタビュー)

この話を聴いて、研究を通した自分の変容について思いを巡らせた。当初はその相手を「研究対象」として捉え、どのように話を聴こうかと考えていた私を、李さんが一人の人間として受け入れてくれ始めたかもしれないという変化を感じ、そこから私の意識も変化していったように思う。それは、「研究対象」は決して研究だけのために存在している訳ではなく、また、こちらが必要なことをただ語ってもらうだけの存在でもないということである。他人である研究者にわざわざ語らなくてもいいことを聴かれ、聴いたらそれっきりという状態はあまりにも寂しく残念であると言わざるを得ないだろう。人を相手にする研究であればなおのこと、その人に対して一人の人として敬意を払い、誠意を尽くさなければならない。それは李さんの変化から、私が教えられたことでもある。また、それを受けて、誠意を持って彼に接することが、李さんのさらなる自己の解放の一助になっ

たのであれば、それは非常に嬉しいことでもある。

戦前は「日本人」として日本語で教育を受け、生活をしてきた彼らは、終戦を機にそれまでの世界が大きく変わってしまった経験を持っている。しかし、そのことは戦後社会によって封印させられ、長い間、彼らの過去やその存在自体も公に認められることはなかった。その語りを聴くことで、心の奥に押し込んできた感情を手放すことができれば、それが結果的に自己の解放へと繋がるのだろう。だが、それ以上に大切なことは、彼らを数奇な運命を辿った歴史の生き証人として扱うのではなく、一人の人間としてそのような声に耳を傾け、その内容を受け止め、彼らの人生を肯定し、共有することなのではないだろうか。語りを受け止めることはもちろん、その内容を語ったその人自身を、誠意を持って受け止めることは確かに難しい。しかし、私はその部分を大切にしていきたい。なぜならそれが、研究者である前に、人として大切にしなければならないことだと思うからである。

【記述の説明】

本文中における文字化資料内の「*」はインタビュアーである筆者を表し「☆」はインタビュアーとインタビュー어의発話の重複部分を示している。

【参考文献】

高橋規子・吉川悟(2001)『ナラティブ・セラピー入門』 金剛出版

台湾観光協会江所長と味わう台湾茶



台湾観光協会は、台湾への観光誘致の為、1956年に設立された財団法人で、1970年東京に、1999年大阪にそれぞれ事務所を設置しました。それから50年近く、日本の方へ台湾の魅力を発信し続けています。さて、台湾の魅力と言え、台湾茶を思い浮かべる方も多いと思います。台湾観光協会東京事務所の江明清所長は、自らを「茶人」と称する程の「茶通」ということで、台湾茶のお話を聞きに、同事務所にお伺いしてきました。

まず入って目に付いたのが、所長室の窓にずらりと大きさ順に並んだ急須（茶壺）。その前の応接セットの横には木の根風の美しい茶盤。くぼみを利用して、多種多様な茶道具を配置しています。この上で、温めるために茶器にかけたお湯等、余計なお湯を捨てると、ちゃんと下のホースを伝ってバケツに落ちる仕組みになっています。

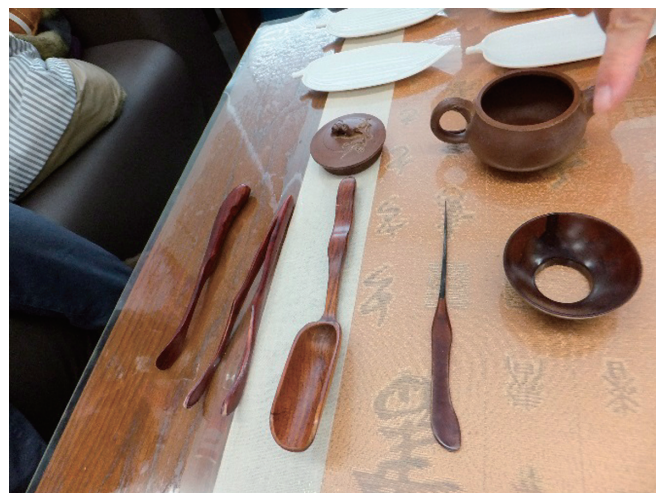
いただいたのは、順に阿里山烏龍茶の①浅い発酵で焙煎が無いもの、②3割程度の発酵で焙煎が中程のもの、③日月潭の紅茶でした。取り寄せて

いらっしゃる伊豆の「観音温泉の水」で淹れてくださいました。まず、茶則を使って、茶壺の五分の一程の茶葉を入れ、95度のお湯を注いだら、①は1分、②は5分経ってから細長い聞香杯に注ぎます。そしてまず、聞香杯を茶杯で蓋をしたら、素早くひっくりかえして聞香杯の香りを楽しみます。この時両手で包み込むように聞香杯を持って、香りを立たせるのがコツだとか。そして茶杯から一口口に含み、口の中でゆっくり転がしてとお茶を味わいます。①のお茶は、色はあまり無いのに香りが清々しく、味に甘みがあり、とろみのような味わいも感じました。②のお茶は、①より発酵度が進んでいるため、深い味わいと甘さも残っており、バランスの取れた味わいでした。三番目に戴いた紅茶は、葉が丸まっておらず、細長い形状。茶壺に入れて沸騰したお湯を注ぎじっくり10分程待ちます。色は、深紅と烏龍茶の中間



○写真「茶盤」

茶壺に湯をかけた際、湯を受け止める道具。お湯は、下に取り付けてあるホースに流れる仕組み。



○写真「茶道具」

奥から茶托（聞香杯と茶杯をおくもの）、茶壺、左手前から茶杓（茶葉を小さい茶壺にいれるもの）、茶挾（使用済み茶葉をつまむもの）、茶則（茶さじ）、茶通（茶壺の口に詰まった葉をつつくもの）、茶漏（茶葉を茶壺に入れる時茶壺に乗せてこぼれないようにするもの）

ぐらいで、渋みは全く感じられないのでミルクなど入れずストレート向きかと感じました。この台湾紅茶、日本統治時代に日本人がアッサム種を持ち込んで根付かせたとのことでした。これら台湾茶は、6煎ぐらいまで飲めるとのこと。茶杯が小さいですから。マグカップで無造作に飲んでいた事を反省しました。

これら台湾茶に合わせるのは、緑豆糕という落雁をしっとりさせたようなものとピーナッツを餡で固めたもの。当方からは桜餅を持って行ったのですが、苦みが少ない台湾のお茶には桜餅は甘すぎるようでした。ほろほろと崩れる緑豆糕をつまんで、お茶を一口。ピーナッツ菓子をつまんで更に一口。台湾の方は、こうして友人や家族と、何時間もまったりとした時間を満喫しているのですね。お作法という緊張感の中で苦い抹茶と甘い和菓子を戴くきりっとした印象の日本の茶道とは、全く違う魅力があります。台中出身の江所長は、春茶の季節にご友人達と阿里山付近へ湧き水を求めてキャンプに行き、そこでお茶会をなさるとのこと。アウトドア+風流・・・なんと健康的なイベントではありませんか。日本のお父さん方にも見習って・・・いえ、広まって欲しいものです。

「茶人」としての江所長は、茶壺のコレクターでもあり、すでに600も所蔵されているとのこと。これら自慢の茶壺を茶人仲間と交換し合う楽しみも格別のように、奥様の目を盗んで、こっそりお買い上げされることもあるお茶目な一面もお有りです。沢山の茶壺をお持ちですが、シンプルな形が一番とのことで、この日も球体が美しい赤茶色の茶壺で供してくださいました。蓋の上から手のひらで包み込むように持って、しっくりくるものが良い茶壺だとか。そして、使えば使うほど、色つやが良くなるとのことでした。

今日も、江所長は、出番が無かった茶壺にお茶をかけては磨いてを繰り返し、慈しむように可愛い茶壺を育てているのでしょうか。そんな台湾を愛



○写真「所長」

直径5センチほどの小さい茶壺からお茶を入れる江明清所長。小さくても美味しく戴けます。

する江所長だからこそ、日本の皆さんに台湾の良さをお伝えすることができるのだと思います。台湾観光協会には各地の資料も揃っていますので、小さな台湾への旅を体験しに、足を運んでみては如何でしょうか。

台湾観光協会 東京事務所

台湾観光協会 東京事務所

電話 03-3501-3591

FAX 03-3501-3586

〒105-0003 東京都港区西新橋 1-5-8
川手ビル3階

台湾観光協会 大阪事務所

台湾観光協会 大阪事務所

電話 06-6316-7491

FAX 06-6316-7398

〒530-0047 大阪府大阪市北区西天満 4-14-3
住友生命御堂筋ビル6階

月～金 9:30～18:00 休日：土、日、祝日、台湾
旧正月元旦、双十國慶節（10月10日）

編集後記

春は出会いと別れの季節です。当協会でも桜がほころび始める3月末に大きな別れがありました。「交流」編集・発行人の井上孝専務理事が逝去されたのです。編集チェックにおいては、厳しいお言葉を賜ったことも多かったのですが、少しでも良質な内容を発信したいという熱い気持ちの表れだったのだろうと今は寂しく思い返しています。

さて、昨年度は円安措置のため、夏から頁数と送付先を削減してまいりましたが、今年度はなんとか復活できる運びとなりました。また心機一転、取り組んで参りますので、皆様には引き続きご愛読いただきたくお願い致します。

(M.N)

交流 2014年4月 vol.877

平成26年4月25日 発行

編集・発行人 小松道彦

発行所 郵便番号 106-0032

東京都港区六本木3丁目16番33号

青葉六本木ビル7階

公益財団法人 交流協会 総務部

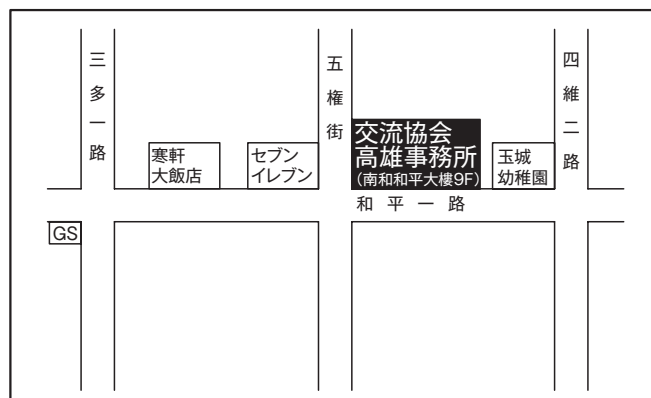
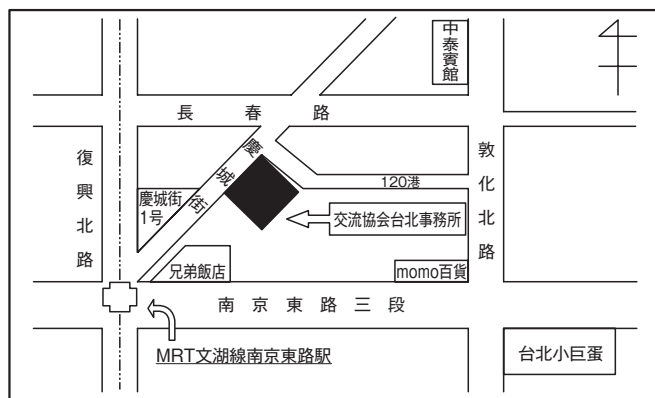
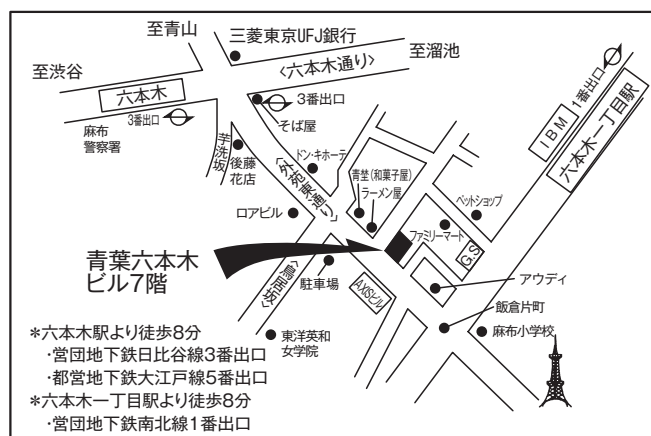
電話 (03) 5573-2600

FAX (03) 5573-2601

URL <http://www.koryu.or.jp>

表紙デザイン：株式会社 丸井工文社

印刷所：株式会社 丸井工文社



台北事務所 台北市慶城街28號 通泰大樓

Tung Tai BLD., 28 Ching Cheng st., Taipei

電話 (886) 2-2713-8000

FAX (886) 2-2713-8787

URL http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/Top

高雄事務所 高雄市苓雅区和平一路87号

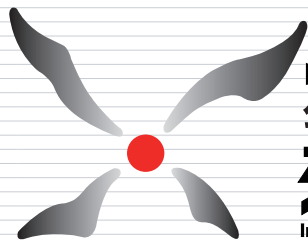
南和和平大樓9F

9F, 87 Hoping 1st. Rd., Lingya Qu, kaohsiung Taiwan

電話 (886) 7-771-4008 (代)

FAX (886) 2-771-2734

URL http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/ez3_contents.nsf/Top



日本と台湾との架け橋

公益財団法人

交流協会

Interchange Association, Japan (IAJ)

